



津市版

授業改善マニュアル

理論編

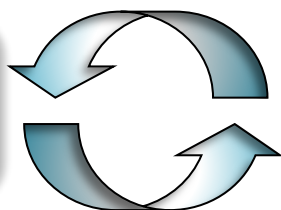
平成28年11月

津市教育委員会

児童生徒の学力向上

教員における授業スキルの継承 授業力の向上

多くの教員の参画
毎年の改訂作業実施



マニュアルを使った
研修会の実施

津市版授業改善マニュアル

大学教授等

助言

津市教育委員会事務局
指導主事等



できる！わかる！
楽しい！

連携・協働

市内学校教員

各教科（別冊）

- ・教科における授業力向上の視点
- ・具体的事例



授業改善総論

- ・授業力向上の視点
- ・ユニバーサルデザイン
- ・授業力向上の構成要素
- ・児童生徒理解
- ・教材解釈授業展開
- ・授業作りの基盤
- ・授業構成
- ・授業評価
- ・学習形態

その他の視点

- ・家庭学習の提示
- ・参考資料
- ・各学校資料
- ・教育委員会資料



21 世紀型学力の向上

教員の資質向上

学習指導要領の解釈

『授業改善マニュアル』（理論編）の活用に向けて

現在の小中学生が社会で活躍する近未来においては、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新、少子高齢化の加速化など、社会情勢が大きく様変わりしていくことが予想されます。

こうした中、一人一人が生涯にわたって能動的に学び続けることにより、時代に即応した様々な力を獲得するとともに、直面する課題に対して、他者と協働しながら解決に向け、果敢に挑戦し、新しい価値を創造することで、より豊かな未来を切り開いていくことが求められています。

そのためには、将来を見据えた教育のあり方自体をよりの確に捉え、進展させる必要があります。特に学校教育において、「学ぶこと」と「社会」とのつながりを意識し「何を教えるか」という知識の質と量の改善に加えて、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視する必要があります。

また、学びの成果として「どのような力がついたか」という視点が重要であり、自己と社会の関係性を自覚し、よりよい社会の実現に向け、未来へ飛躍できる人材を育成する必要があります。

そこで、これまでの授業のあり方を見直し、授業力を高めるための基本的な考え方と各教科での具体的な実践方法について、『授業改善マニュアル（「理論編」・「実践編」）』（別冊「教科編」）にまとめました。

この『授業改善マニュアル「理論編」』では、子どもにつけさせたい力を確認し、子どもたち一人一人が、「わかる」「できる」「楽しい」を実感できる授業を実践するための授業改善のポイントを紹介しています。

学校全体で有効に活用し、子どもが「わかること、できること」を実感できる授業が推進され、津市の未来を担う子どもたちが確かな学力を身につけられるよう取組をお願いします。

平成 28 年 11 月

津市教育委員会



津市版授業改善マニュアル 目次



理論編

第1章	学力向上のための取組の検証	1
第2章	教育の目指すところ	5
第3章	教員の資質・能力	11
第4章	学習指導要領の解釈	15
第5章	授業力向上の視点	20
第6章	子どもにつけさせたい力	28
第7章	授業力向上の構成要素	35
第8章	授業改善とは	38
第9章	家庭学習の提示	40
第10章	参考資料	45
参考	津市版授業改善マニュアルの活用について	55
索引		58



- 授業づくり
 - ・ 児童生徒理解
 - ・ 授業構成
 - ・ 教材解釈
 - ・ 授業展開
 - ・ 授業評価
- 授業づくりの基盤
- ユニバーサルデザイン
- 学習形態



第1章 学力向上のための取組の検証

- 全国学力・学習状況調査を活用し、学校が全国的な状況との関係において、自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立します。
- 市内のすべての学校が、各児童生徒の学力や学習状況をより客観的に把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てます。

学校体制で継続的な検証改善サイクルを確立

小学校6年生平均正答率※（ ）は全国比

教科	H26	H26自校	H27	H27自校	H28	H28自校
国語A	73.8 (0.9)	()	70.0 (0.0)	()	72.2 (-0.7)	()
国語B	53.3 (-2.2)	()	66.7 (1.3)	()	58.7 (0.9)	()
算数A	78.4 (0.3)	()	75.0 (-0.2)	()	77.2 (-0.4)	()
算数B	57.7 (-0.5)	()	46.0 (1.0)	()	47.1 (-0.1)	()

中学校3年生平均正答率※（ ）は全国比

教科	H26	H26自校	H27	H27自校	H28	H28自校
国語A	78.7 (-0.7)	()	75.8 (0.0)	()	75.6 (0.0)	()
国語B	49.9 (-1.1)	()	65.4 (-0.4)	()	65.1 (-1.4)	()
数学A	68.1 (0.7)	()	64.5 (0.1)	()	61.9 (-0.3)	()
数学B	58.8 (-1.0)	()	41.3 (-0.3)	()	44.1 (0.0)	()

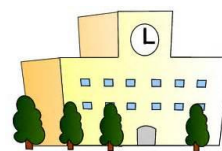
※自校と書いてある欄に、自校の数値を記入し、授業改善等にご活用ください。

小学校は、国語Aと算数A・Bで全国を下回っています。算数においては、「計算の結果を見積もる」「計算の仕方を考える」「計算の結果を振り返って確かめる」など、計算の能力を身につけることが必要です。

中学校は、国語Bと数学Aで全国を下回っており、国語では、目的に応じて必要な情報を読み取ったり、要約したりすること、数学では、図形や資料の活用等に課題があります。

学校質問紙調査結果

学校質問紙の経年比較		H26	H27	H28
調査結果を学校全体で活用	小学校	96.3	100	100
	中学校	90.9	100	100
教育指導の改善・指導計画への反映	小学校	100	86.8	96.2
	中学校	95.5	81.8	86.3
近隣等の小中学校が教育目標を共有	小学校			84.9
	中学校			86.4
国語で様々な文章を読む習慣をつける授業の実施	小学校	71.7	79.3	86.8
	中学校	86.4	81.8	90.9
算数・数学で実生活における事象との関連を図った授業の実施	小学校	43.3	67.9	79.2
	中学校	45.5	54.6	68.1



調査結果を学校全体で共有したり、教育指導の改善・指導計画に反映させたりするなど、効果的に活用している小中学校が増えてきています。

一方、日ごろから様々な文章を読んだり、教科で学習する事柄と実生活における事象との関連を図った授業を行ったりするなど、知識や技術が定着するような手立てが必要です。

今後は、中学校区の小中学校が、教育目標を共有し、小学校から中学校への途切れのない支援を、より一層行っていくことが大切です。

子どもたちが安心して学習できる環境づくり

児童生徒質問紙の経年比較		H26	H27	H28
学校に行くのは 楽しい	小学校	84.8	88.6	86.0
	中学校	83.1	83.8	84.9
	自校			
先生は、自分のよい ところを認めてくれている	小学校	77.1		81.8
	中学校	71.6		80.5
	自校			
自分にはよいところ がある	小学校	74.9	74.1	72.8
	中学校	66.0	69.1	67.6
	自校			



※自校と書いてある欄に、自校の数値を記入し、授業改善等にご活用ください。

子どもたちの良さを積極的に評価する教師の姿が、児童生徒の自尊感情や自己有用感を高めることにつながり、いろいろなことに挑戦しようとする意欲を醸成させます。

日常生活において、一人一人の子どもたちに向き合い、具体的な言葉かけや対応ができるよう、全教職員の目で子どもたちを見守り、少しの言動もキャッチできるアンテナをもつことが大切です。

子どもたちが、安心して学習できる環境を整えることは、互いの学び合いが充実し、全体の学力の向上につながると考えられます。

学びの基盤を支える学習規律等の環境づくり



学校質問紙の経年比較		H26	H27	H28
学習規律の維持 を徹底	小学校	92.5	98.1	92.4
	中学校	100	100	95.5
児童生徒のよさ・可能性を積極的に評価	小学校	96.3	96.2	98.1
	中学校	95.5	95.5	100
児童生徒の発言や活動の時間を確保した授業展開	小学校	92.4	88.7	94.4
	中学校	100	100	95.5

子どもたちの良さや可能性を積極的に評価している学校の割合は高くなっており、「先生が、自分の良いところを認めてくれている」と回答している子どもが増えています。

学力の向上には、子どもたちが安心して学習できる学びの基盤を支える環境づくりを行うことが大切です。あいさつやルールの確認といった集団生活上必要な規律や子どもたちが互いに学び合うことを保障した授業展開等は、教室が安心感や所属感のある場所になり、子どもたちの学習意欲の向上につながります。

個々の教職員には経験等の差があり、考え方や持ち味も様々であることから、学校全体で子どもたち一人一人の良さや可能性を積極的に評価していく体制が必要です。学級担任や教科担任等が、一人で抱え込まず、いろいろな視点から子どもたちを見ていくことが大切です。

学力の向上をめざした授業づくり

児童生徒質問紙の経年比較		H26	H27	H28
授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていた	小学校	75.0	85.5	90.5
	中学校	55.6	77.2	88.7
	自校			
児童生徒の間で話し合う活動をよく行っていた	小学校	82.5	84.3	82.6
	中学校	74.6	85.1	85.3
	自校			
授業の最後に振り返り活動を行っていた	小学校	66.3	72.9	79.0
	中学校	45.8	57.0	65.7
	自校			



※自校と書いてある欄に、自校の数値を記入し、授業改善等にご活用ください。

「授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていた」、「授業の最後に振り返り活動を行っていた」と回答している児童生徒が増加しています。

授業の見通しを持たせるための「めあて」の提示や「振り返り」活動を取り入れることにより、今日の授業で何が身に付いたのかが実感できます。

「今日は、何を学んだか、何が分からなかったか」などを振り返る活動については、授業の最後に行うため、時間が確保できていない状況がうかがえます。授業のタイムマネジメントが必要となってきます。

教えて考えさせる授業づくり

学校質問紙の経年比較		H26	H27	H28
習得・活用・探究を見通した指導方法の改善・工夫	小学校	67.9		90.6
	中学校	72.7		90.9
授業の中で目標(めあて・ねらい)を提示	小学校	92.4	94.3	96.2
	中学校	86.4	81.9	100
児童生徒の発言や活動の時間を確保	小学校	92.4	88.7	94.4
	中学校	100	100	95.5
学級やグループで話し合う活動を実施	小学校	92.5	90.6	94.4
	中学校	81.9	95.5	90.9
授業の最後に学習したことを振り返る活動を実施	小学校	77.3	86.8	88.7
	中学校	77.3	72.7	95.4

「習得・活用・探究を見通した指導方法の改善・工夫」を行っている学校が、平成26年度と比較して小学校で22.7ポイント、中学校で18.2ポイント増加しています。また、目標の提示や振り返り活動については、小中学校において、いずれも増加しています。

子ども主体の授業づくりをすることにより、先生が教え込む授業から、子どもたちが学びとる授業へと変わります。一人一人の子どもたちが、今日の授業で何が身についたのかを実感できることが大切です。



子どもを支える学校・家庭・地域の連携

家庭学習について

児童生徒質問紙の経年比較		H26	H27	H28
計画的に学習している	小学校	60.6	61.6	60.5
	中学校	51.1	51.5	47.8
	自校			
授業の復習をしている	小学校	47.8	48.5	45.2
	中学校	44.8	46.1	45.2
	自校			

地域行事等への参加について

児童生徒質問紙の経年比較		H26	H27	H28
地域の行事に参加している	小学校	68.2	66.9	67.5
	中学校	44.2	48.4	47.0
	自校			
地域社会などでボランティア活動に参加	小学校			56.5
	中学校			73.1
	自校			

※自校と書いてある欄に、自校の数値を記入し、授業改善等にご活用ください。

基本的な生活習慣や家庭での学習習慣の定着を図るためには、地域や家庭との連携が必要です。

家庭学習については、「計画的に学習している」及び「授業の復習をしている」のいずれも、平成26年度の回答と比較して、ほぼ横ばいとなっています。

一方、「地域の行事に参加している」と回答した子どもは、平成27年度と比較して、小学校6年生が0.6ポイント増加し、中学校3年生が1.4ポイント減少しています。また、小中一貫の取組等として、地域の清掃活動等の取組を行っているところがあります。

家庭や地域との連携

家庭学習について

学校質問紙の経年比較		H26	H27	H28
保護者に対して家庭学習を促すような働きかけ	小学校	90.5	90.6	96.2
	中学校	77.3	72.7	95.4
家庭での学習方法等を具体的に提示	小学校	77.4	86.8	90.6
	中学校	86.4	81.8	90.9

地域や家庭との連携について

学校質問紙の経年比較		H26	H27	H28
学力向上のための取組について、保護者や地域の人たちに働きかけ	小学校	77.4	90.6	92.5
	中学校	68.2	86.4	95.5
PTAや地域の人が学校の諸活動に参加	小学校	92.4	96.2	94.4
	中学校	86.4	95.4	90.9

家庭学習については、「保護者に対して家庭学習を促すような働きかけを行っている」と回答した学校は、平成27年度と比較して、小学校が5.6ポイント、中学校が22.7ポイント増加しています。また、「家庭での学習方法等を具体的に提示している」と回答した学校は、平成27年度と比較して、小学校が3.8ポイント、中学校が9.1ポイント、それぞれ増加しています。

今後も家庭・地域への情報発信を積極的に行い、学校が目指している方向性や家庭・地域に何を求めているのかなどを具体的に示しながら理解と協力を求めていくことが必要です。学校・家庭・地域の強い連携が子どもたちの成長につながっていきます。



第2章 教育の目指すところ



なぜ、21世紀型能力なの？

『生きる力』から『生き抜く力』へ・・・21世紀を主体的に生きるために必要な力、これからの社会が求める知性、これらの能力をつけさせる授業が求められています！！



POINT

21世紀型能力のキーワードは、『基礎・思考・実践』です。

◇基礎・思考・実践の3つの観点を意識していますか？

◇適切な課題設定はできていますか？

・・・教育課程編成の7つの視点を知っていますか？

1 21世紀型能力って何？

平成25年3月に国立教育政策研究所が発行した、「教育課程の編成に関する基礎的研究」の報告書5によると、社会の変化に対応する資質を育む教育課程を編成するために、共通認識するものとして、次の3点を上げています。

- 社会の変化に対応できる汎用的な資質・能力を教育目標として明確に定義する必要がある。
- 人との関わりの中で課題を解決できる力など、社会の中で生きる力に直結する形で、教育目標を構造化する必要がある。
- 資質・能力の育成は、教科内容の深い学びで支える必要がある。

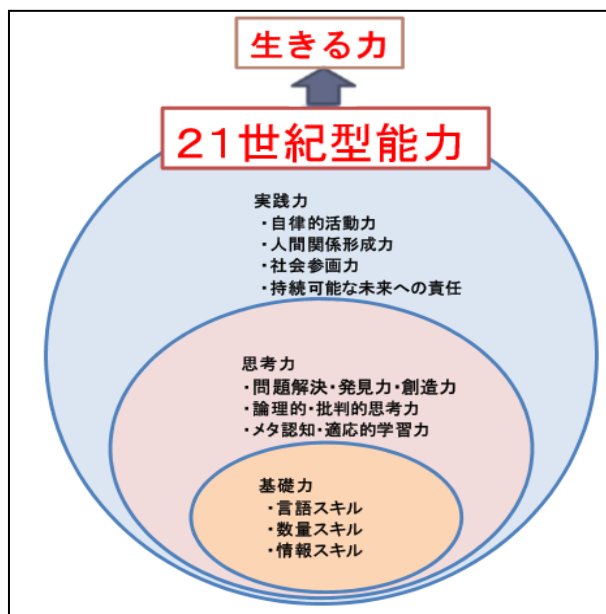


21世紀型？

このことを出発点として、21 世紀を生き抜く力を、これからの学校教育で育成すべき資質・能力として提案しています。

右図は、基礎力が思考力を支え、思考力の向かう先を実践力がガイドすることを示すために3つの円で描かれています。さらに、実践力が21 世紀型能力に繋がることを示すために、円の最も上に位置づけられています。

同時に、この3つの円が重なることで、どのような授業でも、21 世紀型能力という資質・能力を意識して行う必要があることが示されています。



「基礎力」、「思考力」、「実践力」から構成される21 世紀型能力を育成することで、「21 世紀を生き抜く力」を育成します。



基礎力！

- 言語スキル
- 数量スキル
- 情報スキル

知識基盤社会におけるスキルは、従来の「読み・書き・計算」といった基礎的知識・技能だけでは不足です。たとえば、「言語スキル」をひとつとってみても、現代文の読解だけでなく「商品説明」「地図」「保険契約書」などを読んで理解し、適切

に判断しなければなりません。また、急速な情報化社会の発展の中で、言語や数に加えてICTの知識やスキルも必要になってきます。情報処理のスピード化や方法の多様化にも対応するような、より高度な能力が求められています。

「基礎力」を身につける



単に暗記したりテクニックを身に付けさせたりするだけでなく、概念をしっかりと理解させ、様々な問題を解く際に、それらを活用することが必要です。そのためには、単に教科書を読んだり、用語を説明したりするだけではなく、「どうして」「なぜ」を大切にして、本質に迫ることが重要です。

思考力！

- 問題解決・発見・創造力
- 論理的・批判的思考力
- メタ認知・適応的学習力

「思考力」は、言語・数・情報スキルからなる「基礎力」をもとに育成され、論理的・批判的思考力や問題発見解決力、創造力、メタ認知といった能力から構成されます。

「思考力」を身につける



問題を解くために必要な思考力だけではなく、問題を解いた後に新たな疑問やアイデアを考えたり、問題の解き方を振り返らせたりするなど、次の課題解決に活かすことが求められます。知っていることを答えるだけではなく、他人と考えをすり合わせて、吟味し、答えを創出するような課題設定が、特に重要です。

実践力！

- 自律的活動力
- 人間関係形成力
- 社会参画力



生きていく上で出会う様々な場面で、学習した知識や技能を活かして実社会で働かせるべき力であり、知・徳・体の三領域を総合することが求められます。

「実践力」を身につける



主に道徳的・倫理的な視点を中心に、身につけた「基礎力」「思考力」を現実の環境で適用する際に求められる諸能力を、「実践力」と位置づけています。

そのことから、体験的な問題解決学習で議論したり、調査を実施したりする中で、プレゼンテーションを行うなど、まとめ・発表・振り返りといった過程で「実践力」を鍛えることができます。



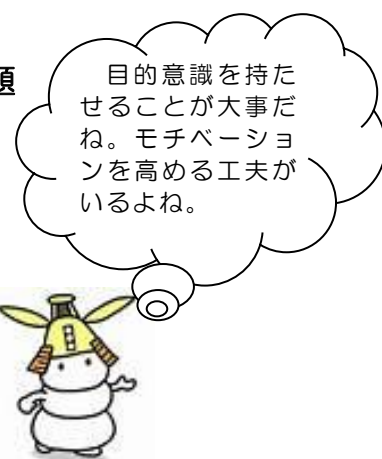
2 21 世紀型能力を育成するための方法

平成 26 年 3 月に国立教育政策研究所が発行した「教育課程の編成に関する基礎的研究」の報告書 7 では、21 世紀型能力を育成するための授業づくりや教育課程編成の視点として、次の 7 つが提案されています。これらの視点にもとづき、教育内容、指導方法、評価の改善を含めた授業のデザインや学習活動のプログラムを考えてみましょう。



視点 1 学びの文脈を創る意味のある問いや課題

- 「自分が今からどのような内容を、何のために学ぶのか、学んだ結果何ができるようになるのか」といった、目的・意味を明確にします。⇒めあて・振り返りの設定
- 子どもが取り組みたいと思うとともに、取組価値がある課題設定が大切です。



▶▶▶ 視点2 子どもから引き出す考えの多様性

- 子どもは、自分なりの考え方をもっています。「考えを聞いてほしい」「発言したい」と思えるような状況づくりが重要です。

▶▶▶ 視点3 考えを深めるための対話活動の導入

- 単なる「意見交換」では、他人と活動するメリットは感じにくいものです。「他人がいないとできない活動」を設定し、対話を通して自分の考えを深めさせます。

対話・交流による協働的な学習活動は、21世紀型学力の根幹だね。

▶▶▶ 視点4 考えるための材料の提供

- 「考えなさい」と言われても考える材料がなければ考えられません。問いに対して、子どもが考える材料にできる知識・経験をどの程度もっているか把握し、足りないのであれば、資料等で補う工夫が必要です。



▶▶▶ 視点5 学習活動やツールへのすべ・手立ての埋め込み

- ICTや掲示物等を活用し「比較する・分類する・関連づける」など思考のすべ・手立てを授業の中に意図的に取り入れる工夫が必要です。

▶▶▶ 視点6 子どもが学びを振り返り、学び方を自覚する機会

- 学び方を振り返って、自覚する機会が繰り返し必要です。メタ認知や学び直しの場を適切に設定することが大切です。

▶▶▶ 視点7 教室や学校に創る学び合いの文化

- 教室に多様性を認める文化が育まれることで、考えの違いが認められやすくなります。お互いの違いを認めることで、自分の考えを深めることにつながります。

3 21世紀型能力を育成するための方策

21世紀型能力の育成においては、その基本原理からしても他者との対話・協働を担保・促進する学び合いは必須とも言えます。

平成 25 年度の全国学力・学習状況調査の結果から以下の 5 つの活動と結果には
相関関係が見られました。

- (1) 授業などで学級やグループで話し合う活動
- (2) 言語活動に重点を置いた指導計画の作成
- (3) 総合的な学習の時間における探究活動
- (4) 授業で目標を児童生徒に示す活動



(小学校ではこれに加え「授業の最後に学習したことを振り返る活動」)

- (5) ICTを活用した協働学習や課題発見・解決型の学習

7 つの視点に照らすと、(1)及び(2)が視点 3 の「考えを深めるための対話活動の
導入」に関わるもの。

(4)が視点 1 の「学びの文脈を創る意味のある問いや課題」及び視点 6 の「子ども
が学びを振り返り、学び方を自覚する機会」に関わるもの。

(5)が視点 5 の「学習活動やツールへのすべ・手立ての埋め込み」や視点 6 を中心
として、7つの視点すべてに関わるもの。

そして、(3)の探究活動も、7つの視点を包含したものだと考えられます。

◆————◆ チェックリスト ◆————◆

- ☐ 授業中でグループ活動を取り入れている。
- ☐ 言語活動を意識した教材づくりをしている。
- ☐ 総合的な学習の時間に探究活動を入れている。
- ☐ めあての提示と振り返りを授業の中で行っている。
- ☐ 協働的な学習、課題解決型の学習を取り入れている。

第3章

教員の資質・能力



なぜ、教員は学び続ける必要があるの？

教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠なのです。



POINT

「学び続ける教員像」のキーワードは、「使命感や責任感、教育的愛情」、「専門職としての高度な知識・技能」、「総合的な人間力」です。
◇ 子どもたちの模範として、自分の姿を意識していますか？

1 教員としてのあり方とは？

子どもたちに「21世紀を生き抜く力」を育成するために、教員が、幅広い視野を持ち、子どもたちの“やる気”をいかに引き出すかが勝負です。

また、教員は高い人格・識見が求められており、変化の激しい時代を生きる社会人として、必要な資質能力を持ち合わせることが大切です。

これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、学校現場の諸課題への対応を図るためには、次のような教員像が求められます。

- 社会からの尊敬・信頼を受ける教員
- 思考力・判断力・表現力等を育成する
実践的指導力を有する教員
- 困難な課題に同僚と協働し、地域と連携
して対応する教員

子どもたちのため
にがんばるぞ！



2 教員に求められる資質能力

これまでも必要であった資質能力

- ・教員としての使命感
- ・人間の成長・発達についての理解
- ・幼児・児童・生徒に対する教育的愛情
- ・教科等に関する専門的知識
- ・豊かな教養
- ・実践的指導力



これからの時代に必要な資質能力

- 自律的に学ぶ姿勢
- 時代の変化や自らのキャリアステージに応じ高めていくことのできる力
- 情報の収集・選択・活用能力
- 知識を有機的に結びつけ構造化する力
- 「チーム学校」のもと、多様な専門性をもつ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力

キャリアステージに応じた力の育成



若手教員の育成

実践力を磨き、教員としての基盤を固めます。
基礎的な力を身につけ、授業力を高めます。



中堅教員の育成

専門性をより一層磨き、ミドルリーダーとして資質を高めます。



指導的人材の育成

マネジメント力を身に付け、豊富な経験を活かし、広い視野で組織的な対応に心がけます。

◆ チェックリスト ◆

倫理観・使命感及び確かな子ども理解

- ☐ 教員の社会的責務に関する理解を深め、信頼される存在を目指し、確かな判断力をもって行動しようとしている。
- ☐ 子どもをよく見ることに徹し、児童生徒の理解を深めている。

人権意識と共感力

- ☐ 児童生徒や保護者の話をよく聴こうとしている。
- ☐ 児童生徒を理解したり保護者と連携・協力したりするための手法を学んでいる。
- ☐ 自分はもちろん、同僚のあり様にも配慮している。

地域社会と連携・協働する力

- ☐ 地域等にある素材を積極的に教材化しようとしている。
- ☐ 教員が社会的な存在であるという自覚のもと、地域の行事やボランティア活動等に積極的に参加している。

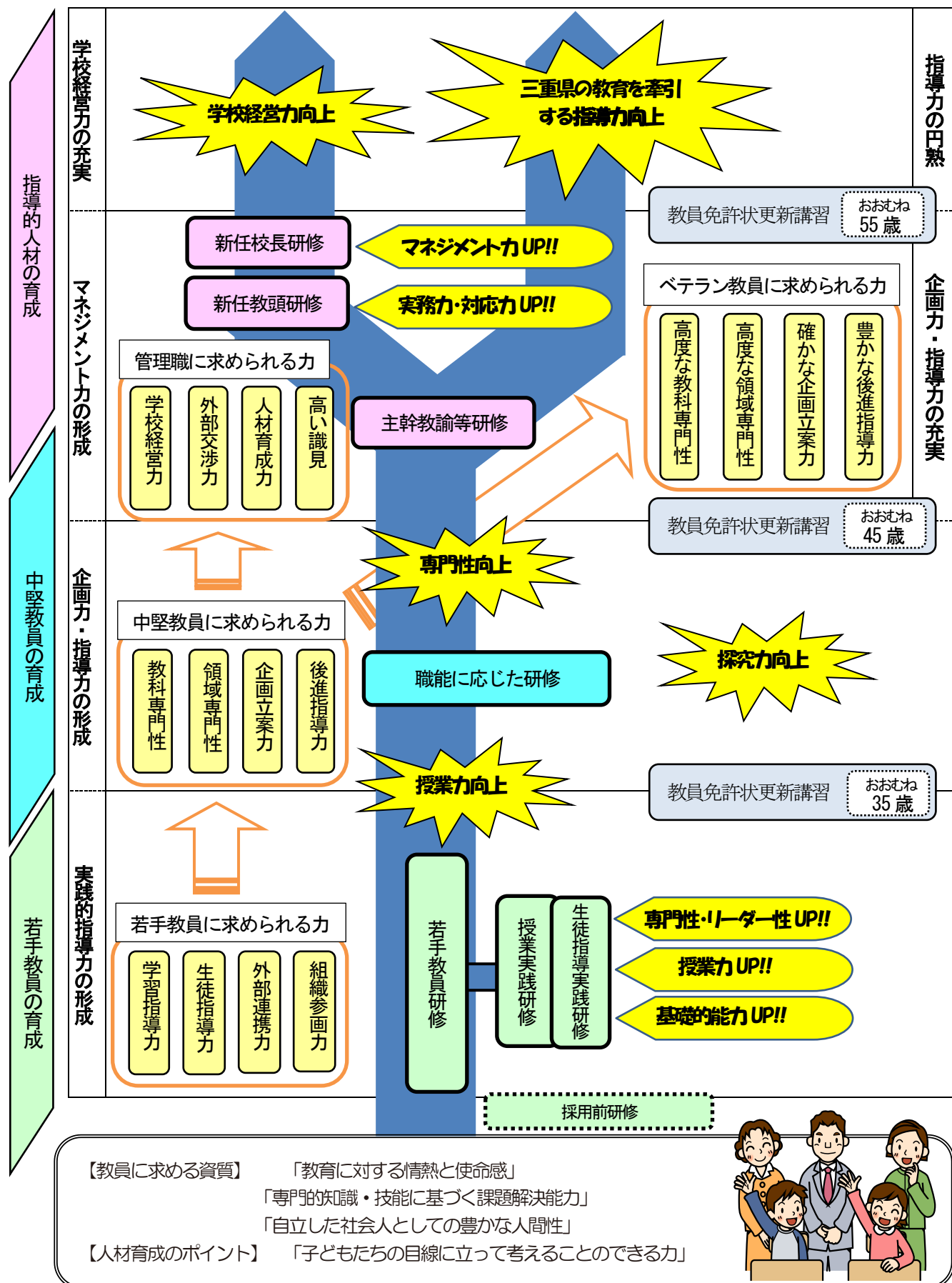
目標実現に向け、柔軟に対応する力

- ☐ 分からないことや困っていることを、同僚や上司に相談し、課題を解決しようとしている。
- ☐ 教育等に関連する最新情報に常に触れ、課題意識を持とうとしている。

「教育のプロ」としての高度な知識や技能

- ☐ よいものや必要なものを学ぶ意欲と謙虚さをもっている。
- ☐ 先輩教員の姿から、専門的な知識や技能を学ぼうとしている。
- ☐ よい授業を数多く見ようとしている。

学び続ける教員の育成（平成28年度版）



（出典）「高い専門性と豊かな人間性を備えた教員の育成のために」（三重県教育委員会 平成28年3月）より

第4章

学習指導要領の解釈



学習指導要領って何？

全国、どの地域で教育を受けても、一定の水準の教育が保たれるよう定められた教育課程の基準です。約 10 年に一度改訂され、法的拘束力があります。



POINT

学習指導要領のキーワードは、「教育課程」、「教科の目標」、「論点整理」、「児童生徒に必要な資質・能力」です。

◇授業に入る前に、教科でつけなければならない力を確認していますか？

◇次期学習指導要領改訂（小学校：平成 32 年度、中学校：平成 33 年度）に向けた動きを知っていますか？

1 「学習指導要領」と「学習指導要領解説」

「学習指導要領」は、学校教育法に基づき国が定める教育課程（カリキュラム）の基準であり、教育の目標や指導すべき内容等が体系的に示されています。

公教育に携わる教員は、書かれている目標・内容等を踏まえ、授業を行います。その際、その記述の意味や解釈などの詳細について説明した教科等別の学習指導要領解説を踏まえ、教育課程を編成し、年間指導計画等や授業等ごとの学習指導案等を作成します。

また、これとは別に、学校教育法施行規則で、小中学校の教科等の年間の標準授業時数等が定められています。

＜学習指導要領における内容、学習活動、資質・能力の記述（例）＞

「内容」について、「学習活動」を通して学習し、「資質・能力」を育てる

【小学校理科 第5学年：電流の働き】

1 目標

物の溶け方、振り子の運動、電磁石の変化や働きをそれらにかかわる条件に目を向けながら調べ、見いだした問題を計画的に追究したりものづくりをしたりする活動を通して、物の変化の規則性についての見方や考え方を養う。

2 内容

A 物質・エネルギー

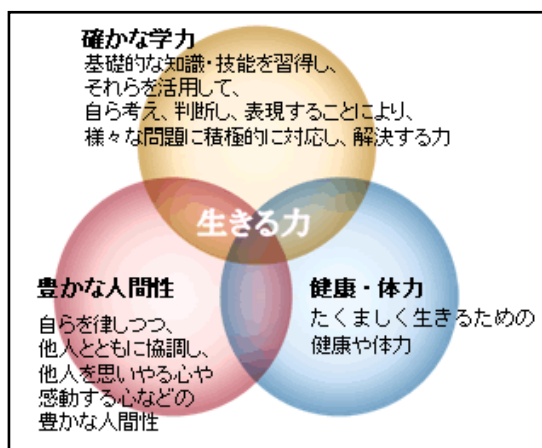
電流の働き

電磁石の導線に電流を流し、電磁石の強さの変化を調べ、電流の働きについての考えをもつことができるようにする。

ア 電流の流れているコイルは、鉄心を磁化する働きがあり（略）

（出典）育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(平成 25 年 11 月 22 日) 発表資料を基に作成

2 現行学習指導要領（平成 20～21 年改訂）では



- 「生きる力」を育むという理念
- 「確かな学力」、特に「思考力・判断力・表現力等」を育む
- 各教科等の目標を実現するための言語活動の充実等について規定
- 「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」（「道徳科」）として新たに位置付ける学習指導要領の一部改正

（参照：文部科学省「道徳教育」関

連ページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/index.htm）

※現行学習指導要領実施以降の改正・改訂

平成 22 年 1 月 30 日 常用漢字表の改定に伴う中学校学習指導要領の一部改正

平成 26 年 1 月 28 日 「中学校学習指導要領解説」のうち社会編の一部改訂

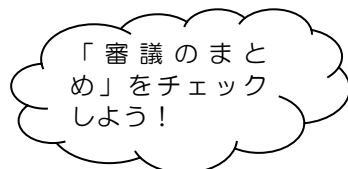
平成 27 年 3 月 27 日 道徳に係る小学校、中学校、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正

3 新しい学習指導要領が目指す姿

(1) 資質・能力の三つの柱

中央教育審議会教育課程企画特別部会（平成 28 年 8 月 26 日）において、「審議のまとめ」がとりまとめられ、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の基本的な考え方について示されました。

その中で、これからの時代を生き抜くために児童生徒に必要な資質・能力は、以下のようになっています。



①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」

- 各教科等において習得する知識や技能。（身体的技能や芸術表現のための技能等も含む。）
 - ➡個別の事実的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含む。
- 技能についても、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくということが重要。
- 知識や技能は、思考・判断・表現を通じて習得されたり、その過程で活用されたりするものである。また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる。

②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」

- 将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な思考力・判断力・表現力等
- 思考・判断・表現の過程
 - ・物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程

- ・精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程

③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」

○前述の①及び②の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定づける重要な要素

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの
- ・多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの



今後は、学習指導要領の構造を、

- ①「児童生徒に育成すべき資質・能力」を明確にした上で、
- ②そのために各教科等でどのような教育目標・内容を扱うべきか、
- ③また、資質・能力の育成の状況を適切に把握し、指導の改善を図るための学習評価はどうあるべきか、

といった視点から見直されることになります。

(2)カリキュラム・マネジメントの確立

今後、各学校には、子どもたちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかという「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められます。

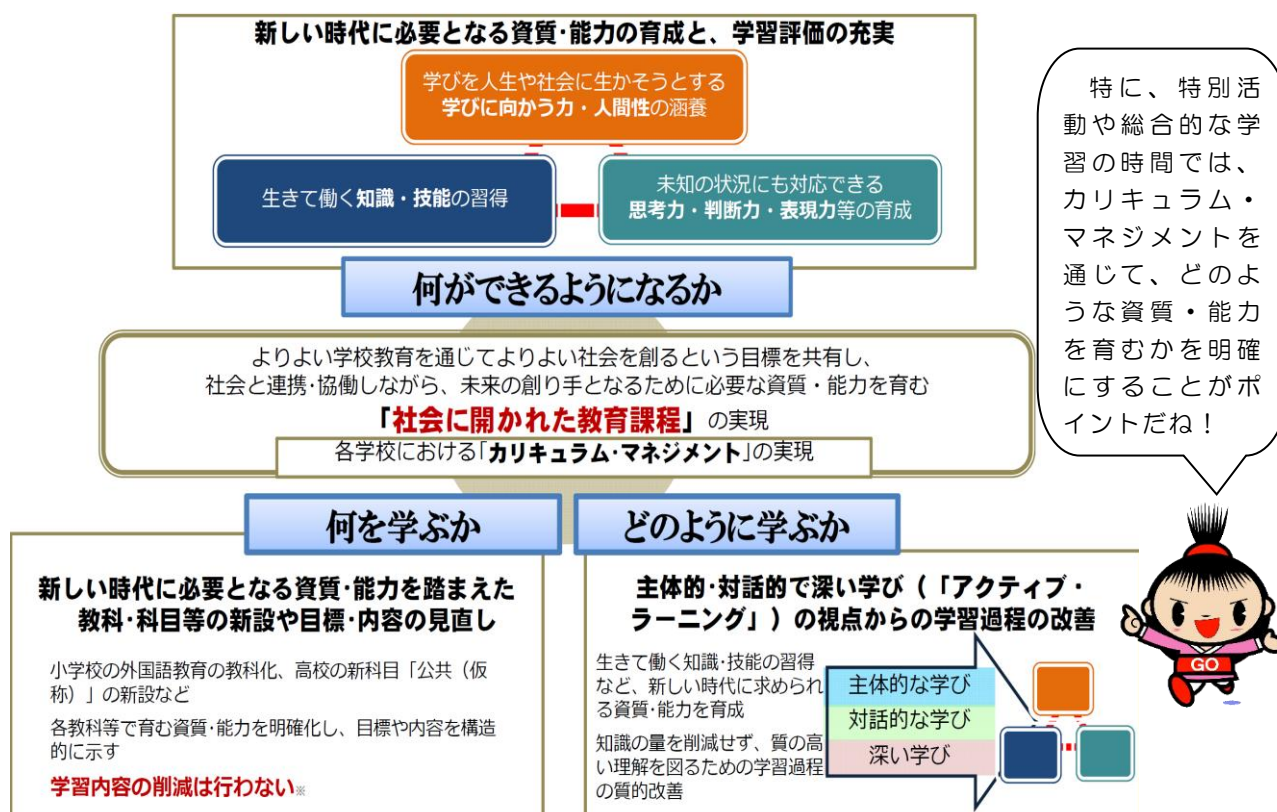
将来、子どもたちが社会で生きていく時に必要な力を身につけるんだね。



「カリキュラム・マネジメント」の3つの側面

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

学習指導要領改訂の方向性（案） 中教審教育課程部会資料より（平成28年8月26日）



チェックリスト

- ☐ 学習指導要領及び解説を授業改善の参考にしている。
- ☐ 道徳の教科化に向けた動きや、次期学習指導要領改訂に係る情報等を、文部科学省のHP等から適宜集めている。

第5章 授業力向上の視点



授業力を向上させるためには？

授業力とは、児童生徒に「生きる力」を育む力であると捉えます。

その授業力を向上させるためには、教師一人一人が、授業のあり方等について状況を把握し、課題を明らかにして、改善することに努める必要があります。

学校教育法 第三十条 第2項

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。



POINT

現行学習指導要領のキーワードは、「習得・活用・探究」です。

◇授業の中に「習得・活用・探究」の活動を取り入れていますか？

◇活用は応用ではありません。「使えた！」を実感できる授業をしていますか？

◇学ばせて、考えさせる過程を取り入れていますか？

1 「習得・活用・探究」を意識した学習指導

現行の学習指導要領では、「習得・活用・探究」について明記されています。文部科学省によると「習得・活用・探究」の学習の流れの考え方について、ポイントは以下の5点になります。

ポイント1

「基礎的・基本的な知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」は、子どもに身につけさせるものです。「習得・活用・探究」は、そのための学習活動の類型を示したものです。



「思考力・判断力・表現力」を育むために（活動例）

- ・体験から感じ取ったことを表現する。
- ・事実を正確に理解し伝達する。
- ・概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする。
- ・情報を分析・評価し、論述する。
- ・課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ・互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。（理論編32ページ参照）

ポイント2

各教科では、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」するとともに、観察・実験をしてその結果をもとにレポート等を作成します。文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといった、それぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を行います。それらを総合的な学習の時間等における教科等を横断した問題解決的な学習や「探究」活動へと発展させます。

ポイント3

これらの学習活動は相互に関連し合っており、はっきりと分類されるものではありません。

ポイント4

各教科での「習得」や「活用」、総合的な学習の時間を中心とした「探究」は決して一つの方向（「習得→活用→探究」）で進むわけではありません。

ポイント5

これらの学習の基盤となるのは「言語」に関する能力であり、そのために各教科等で言語活動を充実させます。

習得とは！

教科の学習が中心となります。基礎的・基本的な知識・技能を身につけることではありますが、それだけでは、習得したことになりません。（ただ丸暗記するだけではありません）

学習したことを児童生徒が使いこなせる（活用できる）ようになって初めて習得したことになります。

覚えてだけでは
だめなんだね。



活用とは！

習得する活動や、探究する活動を展開していく中で、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成を図ることになります。

活用することで新しい知識を獲得したり、問題を解決したりすることから、「活用」することができるようになる学力が実社会・実生活で求められています。

実社会、実生活で活用
することができるよ
うになる学力が、求め
られているんだね。



探究とは！

総合的な学習の時間を中心とした、教科等を横断して知識・技能を活用し、総合的に問題を解決する学習活動です。まず、自ら課題を設定し、身につけた力を活用して課題解決を図ることになります。

自ら課題設
定していくん
だね。



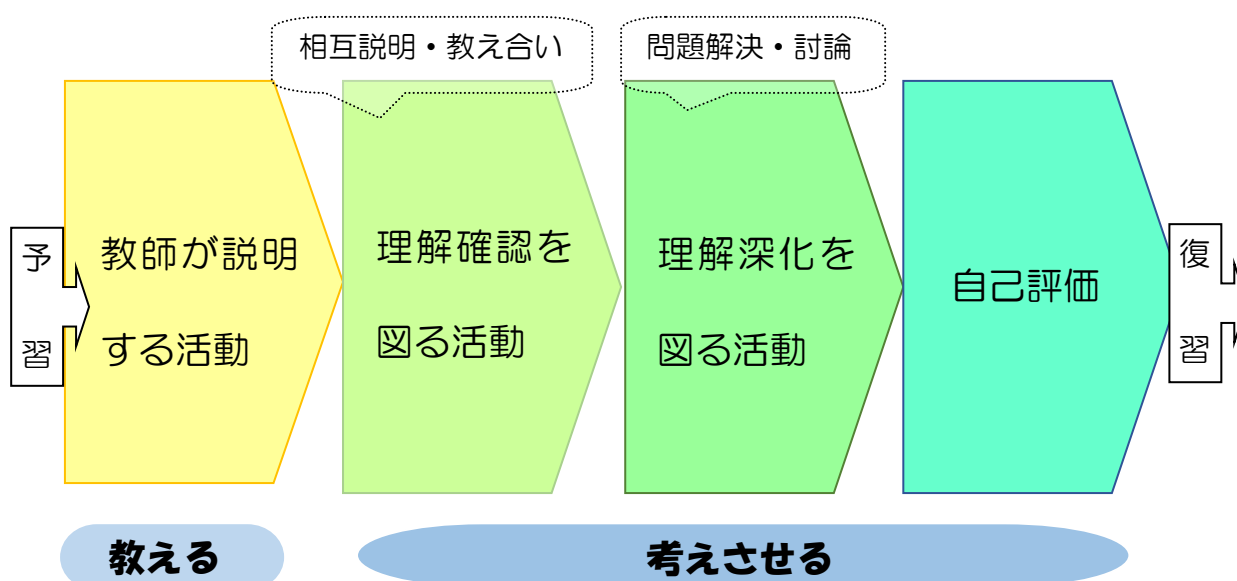
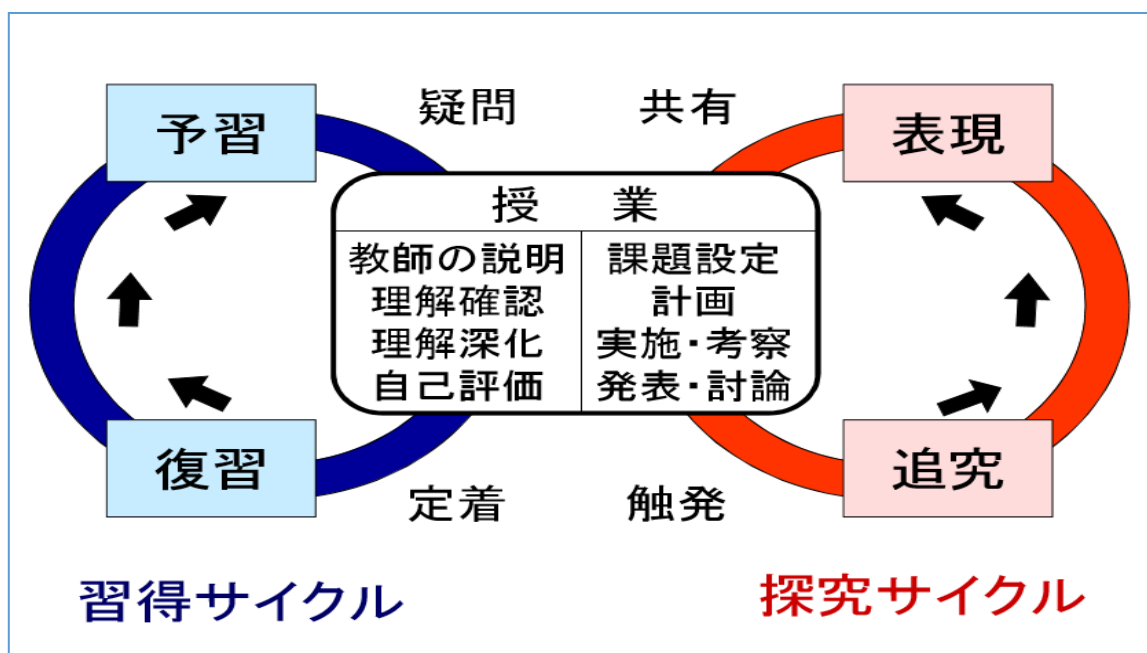
指導をする際には、まず「習得」すべき知識・技能を与えることからスタートするのが一般的です。

子どもたちの「なぜ」「どうして」という興味・関心から入る「探究」を前提として、そこから知識・技能を習得し、活用する学習活動の流れを、状況に応じて取り入れていくことも考えられます。

2 なぜ、「教えて考えさせる授業」

私たちに求められる「習得・活用・探究」を基盤に置いた授業づくりでは、基礎的・基本的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と自ら学び、自ら考える力の育成（いわゆる探究型の教育）を、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成する具体的な方策を示すことが必要です。

すなわち、指導に当たっては、教えて、考えさせることが基本であり、このような過程を各教科等に即して具体的に検討していかなければなりません。



3 「教えて考えさせる授業」とは

「教えて考えさせる授業」は、概念や手続きの意味理解を重視した「習得」の授業のスタンダードな設計原理として、東京大学の市川伸一教授により提案されたものです。

教師からの説明、理解確認、理解深化、自己評価の4つの段階を踏まえて授業を構成することを基本とします。

「教える」の部分では、教材、教具、
操作活動などを効果的に取り入れ、分かり
やすい教え方を工夫することが大切で
す。



「教えて考えさせる授業」が目指すもの



- 1 すべての児童生徒に、やりがいのある授業
 - ・進んでいる子に足踏みさせない
 - ・遅れている子もついていける
- 2 教科書を使って、教科書を超える授業
 - ・予習、授業、復習での共通のリソースとして活用
 - ・児童生徒に合う教材・指導法・課題の工夫
- 3 確実な定着と理解・活用・思考・表現のある授業
 - ・協働学習による参加意識とコミュニケーションの促進
 - ・自己評価によるメタ認知の育成

4 「教えて考えさせる授業」の指導過程と内容

予習 通読してわからないところに付箋を貼る。

まとめをつくる。 簡単な例題を解く。

授業の概略と疑問点を明らかにする。

ここが
わからない

「教えて考えさせる授業」の指導過程と内容

(1) 教師からの説明

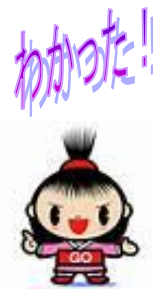
○教材・教具・説明の工夫

- ・教科書の基本的事項の説明
- ・アニメーションや具体操作物の活用

○対話的な説明

- ・児童生徒との対話
- ・答えだけでなく理由の確認
- ・発言や挙手を通じて全体の理解状態を把握

教
え
る



(2) 理解確認活動

○児童生徒自身の説明

理解できているかを確認するため、子どもどうしの説明活動や学び合い活動を行う。

できた!!



(3) 理解深化活動

○誤りそうな問題

多くの子どもが誤解していそうな問題や、間違いを発見できるよう課題を設定し、相談しながら解決

○試行錯誤による技能の獲得

グループ活動による協働的問題解決のなかで相互評価やアドバイスを促す。

考
え
さ
せ
る

大丈夫!!



(4) 自己評価活動

○「授業でわかったこと」「まだよくわからないこと」を記述させたり、「質問カード」を活用したりすることで、子どものメタ認知を促す。また、教師が授業改善に活用する。

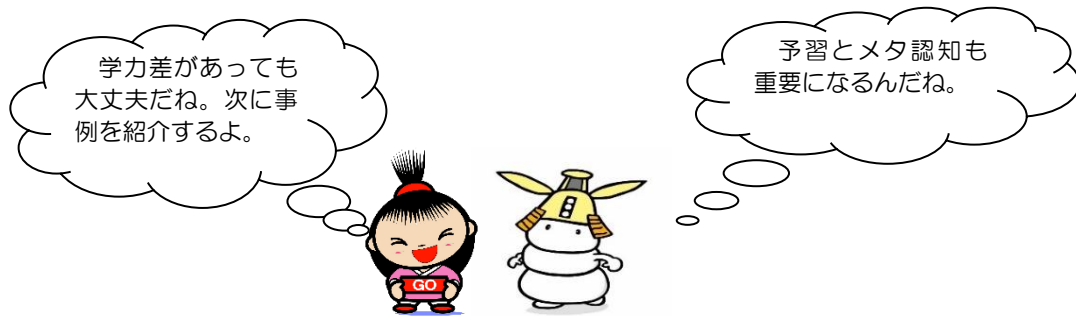
復習 児童生徒が「使えた」「役に立った」と実感
⇒学習の習慣化・定着

役に立った!

5 「教えて考えさせる授業」は学力差があっても大丈夫？

学力差が大きい場合、教師のていねいな説明と理解確認によって基礎知識の共有を図ります。そして、やりがいのある理解深化課題を用意し、問題解決や討論を促すことにより、様々な児童生徒に対応することができます。

また、自分の理解状態を診断するための「メタ認知」を促す自己評価や、協働学習の機会を取り入れることも推奨されます。



授業例 1 平行四辺形の面積の公式の理解



○教師からの説明

面積の公式とその理由（教科書と演示）

底辺と高さの意味／傾けのワザ／切り貼りのワザ

○理解確認活動

様々な向きや形の平行四辺形

底辺のわかっているものには高さを記入／その逆

○理解深化活動

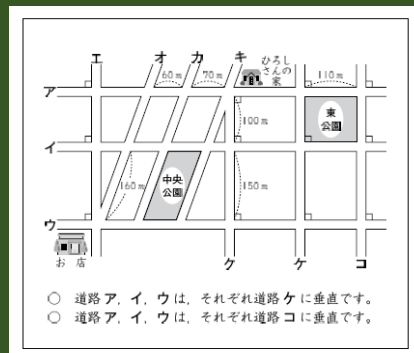
情報過多問題（平成19年度全国学力調査算数B問題）

地図の中の平行四辺形の土地の面積

【問題】

ひろしさんの家の近くに東公園があります。

東公園の面積と中央公園の面積では、どちらのほうがひろいですか。答えを書きましょう。また、そのわけを、言葉や式などを使って書きましょう。



授業例2：てこのつりあいの理解

○教師からの説明

支点の両側に一つずつ重りがある場合の「きまり」

「重さ×支点からの距離」が等しければつりあう

○理解確認課題

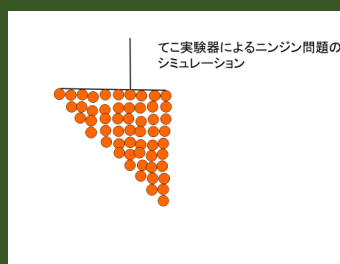
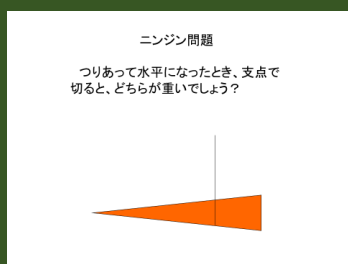
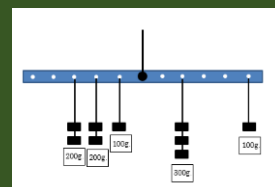
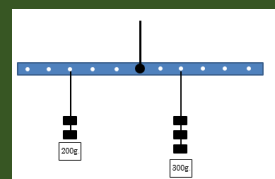
児童がいろいろな場合を計算する

てこ実験器を使ってつりあうかどうかを確認

○理解深化課題

複数の重りがある場合のルールを協働的に発見（積の和ルール）

ニンジン問題（水平につり下げたニンジンの左右の重さ）の予測



※ 理解深化課題の設定の仕方の例

- ◇ 子どもが誤解しそうな問題
- ◇ 習ったことを応用・発展させる課題
- ◇ 思考錯誤による技能の習得（実技系教科）

→ そのために

目標設定の明確化（何をどこまでわかってほしいか）

子どもの理解・誤解についての経験的知識

やりがいのある課題の考案（教材理解と問題づくり）

◆ チェックリスト ◆

- ☐ 教え込むだけの授業になっていないか。
- ☐ 活用することを授業に取り入れているか。
- ☐ メタ認知を促しているか。

（出典）「教えて考えさせる授業を創る」（市川伸一著 図書文化）

「教えて考えさせる授業の挑戦」（市川伸一著 明治図書）

第6章 子どもにつけさせたい力



なぜ思考力・判断力・表現力？

これからの社会は、知識基盤社会といわれています。知識や技能に精通するだけでなく、既存の知識・技能を基に新たなアイデアを生み出し、実践できる人材が求められます。よりよい考えを生み出すための基礎となる思考力・判断力・表現力が求められています。



POINT

子どもにつけさせたい力は、「思考力・判断力・表現力」です。

- ◇ 思考力・判断力・表現力をどのようにつけさせていますか？
- ◇ 思考力・判断力・表現力を一体的な力としてとらえていますか？

1 子どもにつけさせたい力

「自ら学び自ら考える力の育成」といった「生きる力」の理念は、基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視した上で、思考力・判断力・表現力等を育むことを目標としています。

学習指導要領における各教科の知識・技能についても、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成を図る必要があります。

～学力の3要素～

- 知識及び技能
- 思考力・判断力・表現力等
- 主体的に学習に取り組む態度



2 思考力・判断力・表現力とは

課題を解決するために、様々な情報を関係づけるとともに、課題に対する自分の考えを結論づけ、自分の考えを筋道立てて発信する力と考えられます。

学習指導要領では、右の図のように、評価の観点が変更されています。児童生徒が思考・判断した過程や結果を表現したものが、「思考・判断・表現」であると示されたのです。このことから、思考力・判断力・表現力を一体的な力としてとらえる必要があります。

全教科の観点変更		
旧	思考・判断	技能・表現
現行	思考・判断・表現	技能

↓

「思考・判断・表現」で示す「表現」とは、以前の「技能・表現」で評価されていた表現ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動の中で児童生徒がどのように表現(アウトプット)しているかを内容としています。

課題が大切



思考力・判断力は、解決すべき課題が明確でなければ発揮されません。なぜなら、児童生徒は、「なぜ～なのか?」「～とはどういうことなのか?」といった課題に対して、「私は～だと思う。なぜなら…」というように、自分の考えを結論づけ、思考・判断した過程や結果を表現していきます。課題が明確でなければ、何を明らかにすればよいのか分からず、漠然とした思考にとどまり、自分の考えを結論づけることもできません。

3 「思考力・判断力・表現力」の評価とは

3つの力それぞれの評価のポイント

思考＝関係づける思考をしている。

判断＝情報や関係づけ方の選択が正しい。

表現＝思考・判断の結果や経過の表現が適切。



三者を一体とした評価が基本

「思考・判断・表現」の評価のポイント

①結論を導き出せている。

②理由として既習内容などが挙げられおり、関係づける言葉を使って説明されている。

4 思考の手立て



一人一人が、自ら学び判断し自分の考えをもって、他者と話し合い、考えを比較吟味し、よりよい解や新しい知識を創りだし、さらに次の問を見つける力(21世紀能力における思考力)



思考力の育成

思考の手立て(例)	比較する	分類する	関係づける
	★複数のものごとを比べ 類比・対比する。	★ものごとを特徴ごとに まとめる。	★既習学習とのつながりや 関係を見つける。
	・AとBを比較してみましょう。 ・〇〇に視点を当てると、AとBの違いは何ですか？ ・一番〇〇なのは、どれですか？	・どこが同じで、どこが違うかな？ ・何に似ているかな？ ・△△を3つに分け、その理由を説明しましょう。	・AとBの共通点から、何がわかるかな？ ・〇〇を想像しましょう。なぜそう思いましたか？ ・AとBは、どんな関係があるでしょう？
	理由づける	順序立てる	多面的に見る
	★意見や判断の理由を示す。	★視点や観点をもって順序立てる。	★多様な視点や観点に立って 対象を見る。
	・どうやって解いたの？ ・〇〇には、どんな性質がありますか？なぜそう思ったの？ ・△△を選んだ理由は何ですか？	・まずは、何をやるのかな？ ・次は、どんなことが考えられるかな？ ・順番に並びかえると、どうなるかな？その理由も説明しよう。	・もし～だったらどうなるだろう？ ・Aの方法で解いたらどうなるかな？ ・Bの立場に立って考えると、どうなるでしょう。

思考の要素

- 選択する・整理する
- 予想(推測)する・仮説を立てる
- 構想する・計画する・解釈する
- 鑑賞する・把握(理解)する
- 分析する・評価する 等

表現の要素

- 説明する・紹介する・報告する
- 創作する・制作(製作)する
- 描写する
- 音読する・朗読する・記録する 等

他者と一緒に考えることで理解が進む

- ◆自分自身の考えを外に出して確認してみる場面(課題遂行)
- ◆他の人の言葉や活動を聞いたり見たりしながら、自分の考えと組み合わせて、よりよい考えをつくる場面(ヒト列ツグ)

～ 原理原則のレベルと経験則のレベルをつなげる ～

学校で教える

- ・原理原則
- ・科学的概念
- ・論理
- ・法則

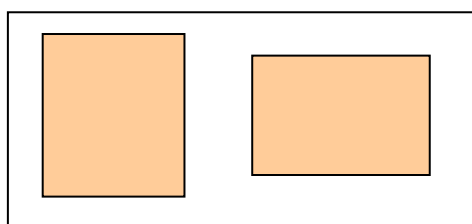
自分のもっている

- ・経験則
- ・生活体験
- ・素朴理論
- ・断片的知識

「子どもが本来もっている力を自然と使ってしまう、使わざるを得ない、使うことが楽しい」・・・そんな授業をつくる



具体例 小4算数科 面積について



形が違う紙の広さを
比べるにはどうし
たらいいかな？



長さの時は、鉛筆何本分などで比べることができたので、広さの時も、ある広さの紙の何枚分かを考えれば、比べることができると思います。

この場面で期待する教科としての見方・考え方は、「長さ比べの学習をもとにし、広さ比べの場合も紙などを敷き詰めてその何枚分かを比べれば、いつでも違うものの広さを比べることができる。」です。

そして、それを導き出すために関係づけさせたい既習内容は、「長さ比べの学習」です。適切に表現されています。



重なる部分を重ねて、はみ出したところに鉛筆で印をつけます。それぞれの紙ではみ出したところ同士を重ねて、また鉛筆で印をつけます。

これを繰り返せば、比べられると思います。

直接比較で考えていますが、考え自体は間違っていない。

ただ、この考えを導き出した理由が書けていないので、このままでは不十分です。

このような発言が出た場合「どうして、このように考えたの？」「これまで似たようなことがあったの？」等、問い返すことで、理由を明らかにすることにつながるかもしれません。



周りの長さが長いほうが、面積が広いはずなので、それで比べられると思います。

「周りの長さが長いほうが、面積が広い」という前提の部分に間違いがあります。この間違いが全ての間違いの原因に見えますが、もしも前提が正しかったとしても、やはり関係づけや表現の仕方が不十分です。他の人に伝わる論理や表現にはなっていません。

このような場合、内容の違いだけに目を向けていると、その教科が不得意な子どもには、思考・判断・表現について、いつも指導ができていないことになってしまいます。すぐに、他の児童の考えと比べ、排除するのでなく、考え自体に含まれる論理や表現の仕方について、一人一人の子どもが思考・判断できるような学習にすることが大切です。

5 思考力・判断力・表現力等の育成例

子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育成するためには、各教科において、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、実験・観察、レポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させる必要があります。具体的な活動例として、以下のものがあります。



体験から感じ取ったことを表現する

- 日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する。



事実を正確に理解し伝達する

- 身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する。



概念・法則・意図などを、説明したり活用したりする

- 需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて、生産活動や消費活動に活かす。
- 衣食住や健康・安全に関する知識を活用して、自分の生活を管理する。

情報进行分析・評価し、論述する

- 学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連づけるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する。
- 文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚（1,000字程度）といった条件の中で表現する。
- 自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする。
- 自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する。

課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

- 理科の調査研究において、仮説を立てて、実験・観察を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする。
- 芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展

- 予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う。
- 将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験をさせる。

思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語の能力の育成に当たっても、発達の段階に応じた指導が重要です。

国語科のみならず各教科等において、記録、要約、説明、評価、論述といった言語活動を発達の段階に応じて行うことが大切になってきます。



【理科の場合】



- 小学校中学年では、植物の観察などにおいて、問題意識や見通しを持ちながら視点を明確にして、差異点や共通点をとらえ記録・表現する。
- 小学校高学年では、ものの溶け方などにおいて、条件や規則性に着目して事象を説明する。
- 中学校では、「観察・実験の結果や状況により資料等を加え考察し、科学的な概念を理解し、実証性・再現性・客観性などの視点から評価、論述したり、討論したりする。」といった発達の段階に応じた言語活動が考えられる。

◆ チェックリスト ◆

- ☐ 思考力・判断力・表現力を問う明確な課題設定ができています。
- ☐ 思考力・判断力・表現力等の育成のための工夫をしている。

第7章 授業力向上の構成要素



なぜ、構成要素を考えるの？

授業力向上は、私たち教員の永遠のテーマです。授業力を高めるには、多くのことを考えなければなりません。そのために、考えることをカテゴリー化し、整理することは重要です。



POINT

授業力向上のために何をするのか・・・構成要素の理解が大切です。
◇よい授業をするためには、どうしたらよいか悩んでいませんか？
◇よりよい授業にするためには、どのような力が必要であるか整理されていますか？

1 授業力とは

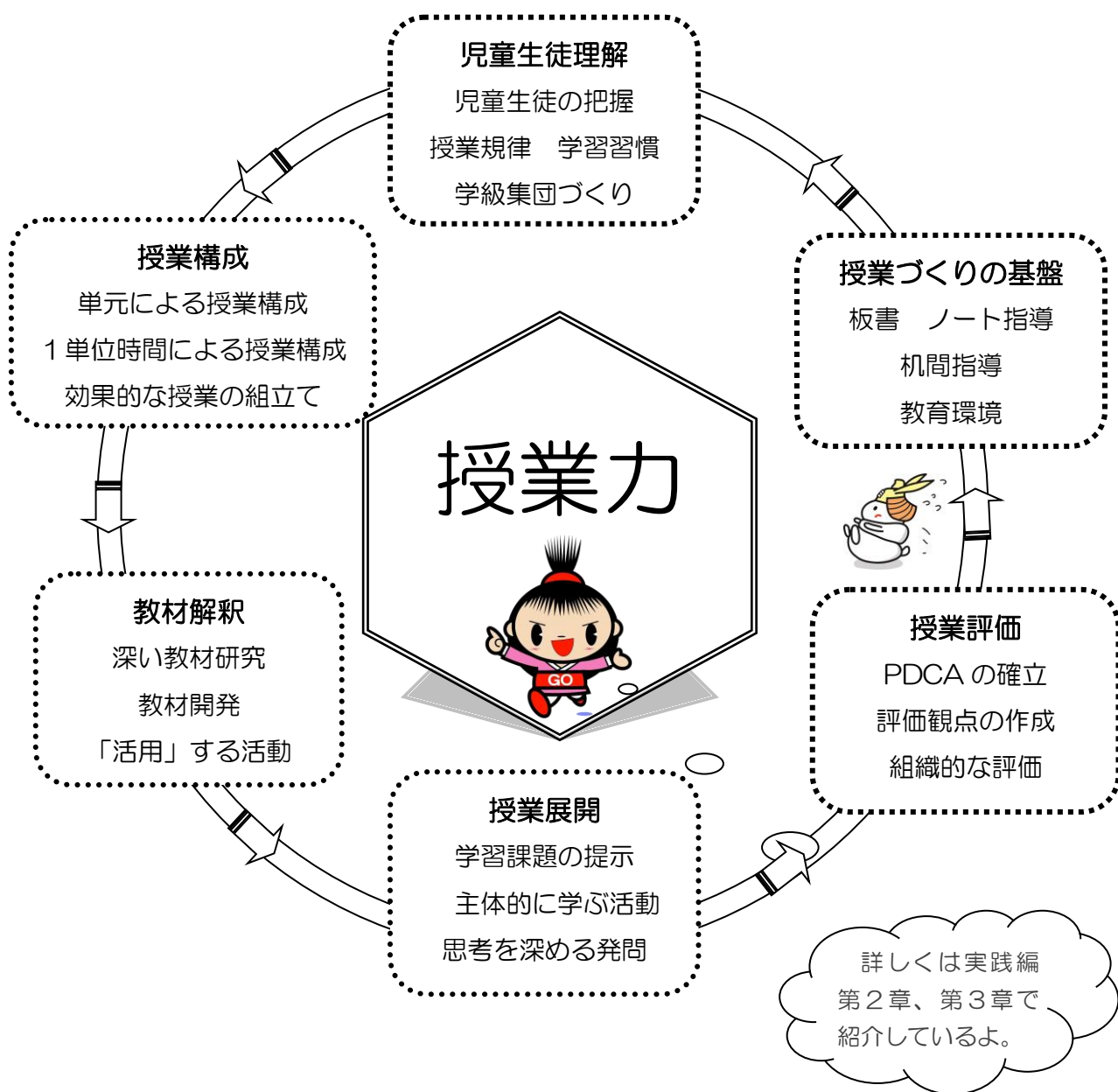
教員の資質・能力のうち、特に実際の授業の場面において具体的に発揮されるものを「授業力」と捉え、その構成要素を「児童生徒理解」「授業構成」「教材解釈」「授業展開」「授業評価」「授業づくりの基盤」の6つに整理しました。

各教員が授業を振り返ったり、研究授業を工夫したりする際に、これらの構成要素に着目し、授業を見直す視点をもつことで、各教員の授業力を高めることができ、児童生徒の「生きる力」の育成につながっていきます。

授業力の向上が、生きる力を育みます。



6つのカテゴリーで考えると分かりやすいよ。



2 構成要素と教員が身につけておきたい力

児童生徒理解力 ⇨ 実践編2ページ

- 児童生徒一人一人の学習意欲や学習内容の定着状況、学級における人間関係等の状況を把握する力
- 児童生徒の発言や行動を共感的に受け止める力

授業構能力 ⇨ 実践編4ページ

- 単元や各時間のねらいを明確にし、その達成にふさわしい教材解釈やそれに基づく展開や学習形態の工夫を行う力
- 適切な評価内容及び実施計画を設定する力

教材解釈力 実践編 11 ページ

- 授業に用いる教材や資料の分析を的確に行い、ねらいにあった教材や資料を選択・開発したり活用したりする力

授業展開力 実践編 14 ページ

- 発問・指示を的確に行う力
- 児童生徒の学習状況に応じて臨機応変に対応する力

授業評価力 実践編 25 ページ

- 評価や児童の反応から授業を振り返る力
- 授業で活用できるよう学んだことを記録・蓄積する力
- 教員同士で学び合うことができる力



授業づくりの基盤 実践編 33 ページ

- 板書を構造化する力
- 学習環境を整備する力

◆————◆ チェックリスト ◆————◆

- ☐ 構成要素を意識して授業をしている。
- ☐ 構成要素に必要な力をつけている。
- ☐ 日々の授業の中で授業力向上を目指している。

第8章 授業改善とは



なぜ、「授業改善」なの？

「わかる」「できる」「楽しい」授業を実践するためには・・・？

➡ 日々の授業改善が大切です！

子ども主体の授業になっていますか・・・？

➡ 授業づくりのポイントを押さえて授業力UP！！



POINT !

1 「めあて」・「課題」の提示

児童生徒が「やってみたい！」と思えるようなめあて・課題になっていますか？

2 深い教材研究

「めあて」・「課題」を達成するための「教材」と「活動」が授業展開の中で適切に用意されていますか？

3 的確な「説明」「発問」「指示」

児童生徒の学びの中で効果的な「説明」「発問」「指示」になっていますか？

4 「つなげること」を意識した展開

児童生徒の発言やつぶやきを大切に、他の児童生徒の発言とつなげながら授業を展開していくことを意識していますか？

5 「基礎」「基本」は教え、考え、活動させる授業展開のバランス

「教えるところ」と「考えさせるところ」、「活動させるところ」が、授業の展開の中にバランスよく位置付けられていますか？

6 力を付ける「まとめ」と「振り返り」

「何がわかった」「何がわからなかった」のかを振り返り、次の授業に活かしていますか？

7 カリキュラムマネジメントにつながるタイムマネジメント

学習規律が保たれた中で、リズムのある授業が展開されていますか？



子ども主体の授業にするために

授業評価

『確かな学力』を育むためには…
一人一人の教員が、授業力向上に
努め、日々の授業改善

授業展開～子どもたちが主体的に学ぶ授業～

① 学習意欲を高める『めあて』の設定

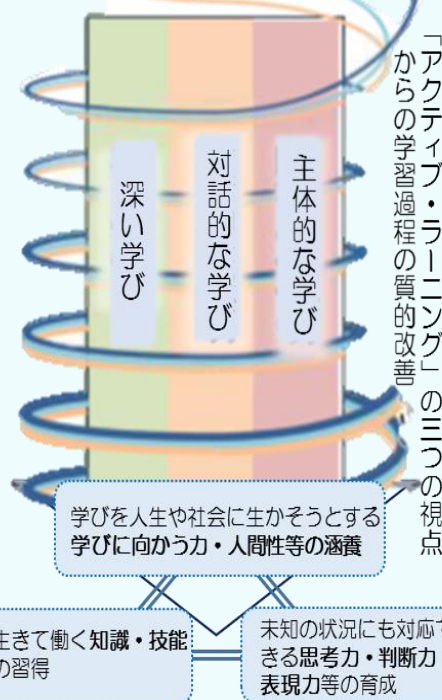
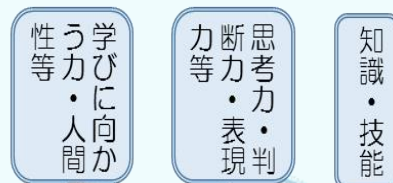
- ・児童生徒の興味・関心を喚起
- ・考えたくなる『めあて』

② 児童生徒の『学び合い』の充実

- ・自分で考え自力解決(個人思考)
- ※考えの交流《ペア・グループ・一斉》
- ※お互いを認め合い、尊重し合う集団
- ・一人一人が積極的に授業参加(集団思考)

③ 『振り返り』の活動の充実

- ・「わかった」「できた」を実感
- ※自己の変容を自覚
- ・新たな課題への意欲



授業づくりの基盤

すべての子どもたちが、「わかる・
できる」を実感するための、工夫や
配慮

カリキュラムマネジメント

学習の効果を上げる授業のリズ
ム、タイムマネジメントを意識

児童生徒理解

- ・個人として理解
- ・集団として理解
- ・集団との関わりから個人を理解

授業構成

学習のねらいの達成のため
の授業の綿密な構想（ねらい
と学習活動が一貫したもの）

教材解釈

- ・教材そのものへの理解・解釈
- ・子どもの視点から教材を理解・解釈
- ・教材を通して育てたい力を確認

第9章

家庭学習の提示



家庭での学習習慣を身につけさせるためには？

家庭学習の習慣化を図るためには、家庭の理解と協力を得る必要があります。学校としての方針を示し、計画的に指導するとともに、あらゆる機会を捉えて、根気強く保護者に協力を求めていくことが大切です。



POINT

家庭学習のキーワードは、「授業と連動した『宿題』」、「自主的な学び」、「探究的な学び」です。

◇家庭学習ノートなどに、子どもたちの頑張りを評価するコメント等を書いていませんか？

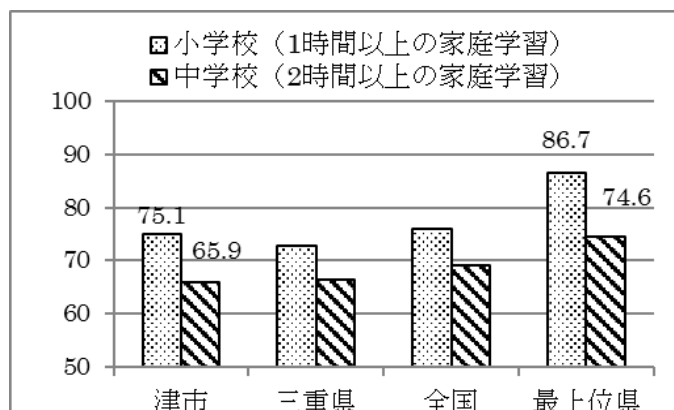
◇学級だより等で、学習内容を保護者に知らせていませんか？

1 津市における家庭学習の状況（平成27年度全国学力・学習状況調査結果）

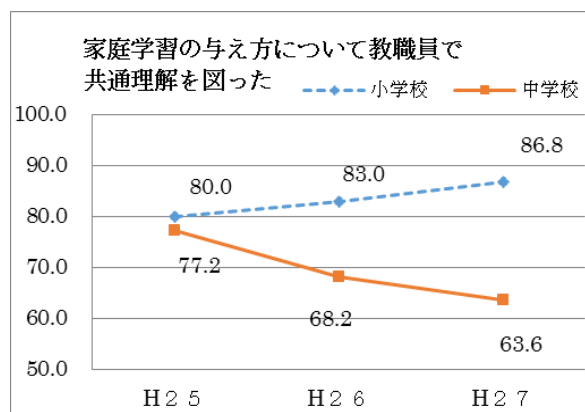
【児童生徒質問紙調査】

小中学校とも家庭における学習時間が全国と比べ短い傾向にあり、平均正答率が最も高かった県と比べると10ポイント程度の差があります。

また、「家で、学校の授業の復習をしている」と回答した児童生徒の平均正答率は、全ての教科で高い傾向にあり、最も高かった県と比べると、特に小学校において差が大きくなっています。



平均正答率が最も高かった県では、「家で、自分で計画を立てて勉強している」、「家で、学校の授業の予習をしている」、「家で、学校の授業の復習をしている」と回答した児童生徒の割合が高くなっています。



【平成 27 年度全国学力・学習状況調査学校質問紙調査】

家庭学習の与え方について教職員で共通理解を図った学校の割合は、小学校では、平成 27 年度は 86.8%と上昇しているものの、中学校では、63.6%と減少傾向にあります。

さらに、家庭学習の内容について、「調べた内容を文章に書いたりする宿題」を与えた学校の割合は、平成 25 年度と比較して小学校では、10.9 ポイント、中学校では 35.3 ポイント上昇しています。児童生徒質問紙の「家で学校の宿題をしていますか」では、小学校で 97.4%、中学校で 92.4%と児童生徒の割合も学校質問紙と同様の割合を示しています。

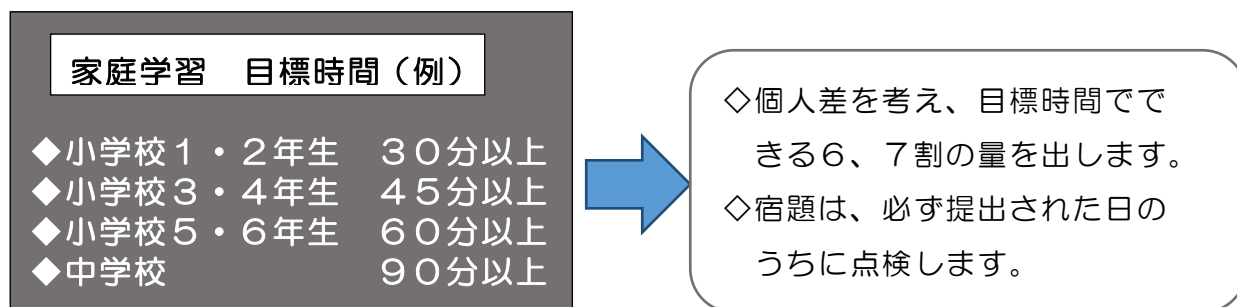


授業で学習した内容は、家庭で復習したり、反復練習を繰り返したりすることで知識や技能が定着します。また、授業で学ぶことを前もって知っておくことで学習理解が高まります。

このことを踏まえ、家庭学習習慣の確立に向け、学校全体での共通理解はもちろんのこと、学校と家庭の連携をさらに強化していく必要があります。

2 家庭学習の習慣化に向けて

家庭での学習習慣についての指導は、これまで以上に重要となってきています。計画的・継続的な学習習慣の確立に向け、全教員が共通理解をし、全校体制で取り組むことが大切です。その際、個々の児童生徒の実態を考慮し、学習時間や学習量について設定します。



(1) 授業と連動した家庭学習

家庭学習では、授業と連動した宿題（課題）を与え、復習・予習に取り組ませることで、児童生徒に基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせます。また、学習意欲を高めたり、規則正しい生活リズムの形成や保護者の意識の高揚につながったりします。

宿題（課題）を次時の授業等で活かし、「家庭学習をして授業がわかりやすくなった。」などの成就感や充実感を味わうことができるようにすることが大切です。

授業での成就感や充実感の積み重ねが、進んで家庭学習を行う姿勢につながります。

(2) 学習方法の提示

宿題は、基本的に一人で取り組めるものを出します。小学校低学年では、保護者もついて見守ってもらえるよう働きかけます。中学年や高学年においても、宿題の終了時に保護者に目を通してもらうよう働きかけます。

中学生に対しては、学習計画を作成させ、個別にアドバイスをを行います。

小学校では、学級担任がほとんどの教科を担当していることから、一冊の「自主学習ノート」で取り組ませることは問題ありません。

一方、中学校は、教科によって担当が異なるため、各教科の「学習ノート」で取り組ませることが効果的と考えます。

(3) 計画的な自主学習

教科書の練習問題を自主的な課題としたり、新聞を活用した調べ学習をさせたりして、自主学習につながる取組をしている学校もあります。これらの取組を見

直し、教科指導の観点のみならず、「自ら学ぶ力」の育成の観点から、自主学習を意図的・計画的に取り入れることが必要です。

(4) 一人一人に合った学習方法

学習における得手不得手（書くことが得意、聞くことが得意、話すことが不得意など）やどんなタイプの勉強方法が向いているか（書いて覚える、読んで覚える、空書きすることで覚えるなど）、毎日の予習復習のやり方など、学習のスタイルは個人によって違います。

自分がどこまで理解できたのか、どういう積み重ねで到達目標に近づいていくのかなど、自分では見えない部分がたくさんあります。そのような見えない部分を認知する力をメタ認知能力といいます。

子どもたちは、めあてに対する振り返りをしたり、それを振り返りカードに記入したりして、自分のこと（メタ）をもっと知る（認知）必要があります。

また、それぞれの児童生徒に対して、どのような学習方法が合っているのか、本人に教えていくことが大切ですし、評価方法にもそれを加味したほうが良いでしょう。

「書く」テストばかりではなく、パフォーマンステスト（「音読」、「会話」テストなどの実技テスト）も頻繁にすることが大切です。

◆————◆ チェックリスト ◆————◆

- ☐ 「宿題」を見直し、授業と連動したものになっている。
- ☐ 授業で習ったことを家庭に発信している。
- ☐ 子どもたちは、意欲をもって主体的に家庭学習に取り組んでいる。

<家庭学習について（例）>

◆A小学校の「家庭学習の手引き（3・4年生用）」より

【家庭学習の進め方】

- ①机の上をきれいにかたづけて、学習道具を準備しよう。
- ②課題(宿題)を最後まであきらめずにやろう。
 - ・文字や数字をていねいに書こう。
 - ・わからないところは、調べたり、お家の人に聞いたりしよう。
 - ・終わったら、まちがいがいないか、もう一度見直しをしよう。
- ③自主学習にもチャレンジしてみよう。

○漢字練習 ○計算練習 ○音読練習 ○教科書の視写
○復習やまとめ ○日記や作文 ○意味調べ ○漢字・言葉集め
○ことわざ集め ○観察や実験 ○地名調べ ○読書 など

◆B中学校の「家庭学習ガイドブック」より

【学習のポイント】（2年生）

自分自身で勉強方法や学習内容を工夫して、何をするか自分で考え、決められるようになることが大切です。2年生は、自分で調べたり考えたりして、授業に臨むようにする学年です。

- 予習で工夫を！
教科書に書かれている内容を読むだけでも効果は絶大です。
- 復習に重点を！
教科書やノート、プリントを使って学習のポイントを整理する。
- 苦手の克服を！
わからない問題をわかるところまで戻って学習し直す。
- ミスをなくす！
間違ったところは、必ず見直す学習をする。
- テスト結果の検証を！
取り組み方を見直し、学習方法の改善を行う。

第10章 参考資料



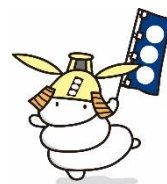
各小中学校が作成した授業作りのルール 及びチェックシート

- 一志中学校
チェックシートは、全員が行っている公開授業で使用されているシートです。視点が明確にされており、教科の専門性にかかわらないため、教科外の先生も、自分化することができます。
- 北立誠小学校
ルールは、教職員用については、全員が名札に入れ、意識して授業をされています。子どもにも徹底されおり、学校が同じ方向を向いて授業改善に取り組んでいます。
- 久居西中学校
校内研修など機をとらえ、職員一斉に自分の授業を振り返り共有します。学校の方向性を確認することができます。



教育研究支援課作成の授業作りに関する資料

- めあてと振り返り（平成27年3月発行）



		授業参観チェックシート	A 良い B 普通 C 問題あり			
		項 目	評 価			メ モ
研修 テーマ	1	「めあて」は学習の見通しと学習意欲をわかせるものであったか？	A	B	C	
	2	「学習の流れ」は適切に表示されていたか？	A	B	C	
	3	「振り返り」は「めあて」と対応していたか？	A	B	C	
	4	板書は見やすく整理され、生徒がノートを取りやすかったか？ (色の使い分け、文字の大きさ、美しさ、囲い方、消し方など)	A	B	C	
	5	グループ活動は、全員が話し合いや活動に参加していたか？	A	B	C	
教師の 言葉	6	授業における言葉遣いは適切だったか？	A	B	C	
	7	ゆっくり、はっきり、語尾までしっかり明瞭に話していたか？	A	B	C	
	8	肯定的評価の言葉を出していたか？ (「よくできたね」「チャレンジできるね」など)	A	B	C	
	9	励ましや注意の言葉を適切に出していたか？	A	B	C	
	10	教師はしゃべりすぎていなかったか？	A	B	C	
生徒の 思考	11	発問は明快で考えようとする意欲をわかせるものだったか？	A	B	C	
	12	生徒の考える時間を確保していたか？	A	B	C	
	13	生徒は一生懸命に思考力を働かせていたか？	A	B	C	
	14	グループ活動によって思考が深められたか？	A	B	C	
	15	生徒の意見と意見をつなぐことができていたか？	A	B	C	
教材の 準備・ 工夫等	16	教材(もの、画像、映像など)の工夫は見られたか？	A	B	C	
	17	ワークシートや配布物に工夫が見られたか？	A	B	C	
	18	立ち位置や机間巡視は効果的だったか？	A	B	C	
	19	授業は笑顔で始まり、笑顔で終わっていたか？	A	B	C	
	20	チャイムとともに始まり、チャイムとともに終わったか？	A	B	C	

参観シート

【 授業の様子から 】

年 組	
教 科：	
月	日 授業者：

	流れ
	10 分
	20 分
	30 分
	40 分
	50 分

教師の意図したねらい
(授業者はこの授業の目標・ねらいを何に
おいていたか?)

「めあて」の設定はどうであったか?

学びが成立している場面・学びが成立
していない場面
(子どもがどこで学んでいたか、どこ
で躓いていたか)

振り返りの設定は?

この授業から気づいたこと、学んだこと
をお聞かせください

名前



【学びの十か条（児童用）】

- 1 早寝 早起き 朝ごはん
- 2 あいさつは 立ち止まって 心こめ
- 3 あきらめず 難しいことにも 挑戦しよう
- 4 読書で 頭と心の 栄養を
- 5 きまりを守って 楽しい生活
- 6 訳も言います 「なぜかと言うと～」
- 7 「ま・つ・だ」を使って 筋道立てた 説明を
- 8 毎日書こう！ 3分間作文
- 9 毎週月曜日は「家庭学習の日」
- 10 家庭学習は テレビを消して 集中しよう！

【授業づくり10か条（教師用）】

- 1 不必要なものをすべて片づけて授業を開始すること
- 2 時間どおり始めて時間どおりおわること
- 3 めあて・課題・学習内容を板書で明確に示すこと
- 4 1 指示1 動作。指示は短く的確にすること
- 5 「個人で考える」時間を必ずつくること
- 6 理由を話したり書いたりすること
- 7 話し合う時間を必ずつくること
- 8 子どもの発言を子どもに返すこと
- 9 子どもをほめること。発言を認めること。
- 10 授業の最後に振り返りの時間をとること。



日時	自己評価(できた 5 → 4→ 3→ 2→ 1できなかった)	校内研修会を経て…
月 日	①めあてを提示できた 5・4・3・2・1	【明日からの授業に活かしていきたいこと】
	②めあての設定は適切だった 5・4・3・2・1	
	③振り返りを書かせることができた 5・4・3・2・1	
	④振り返りシートに、書いて欲しいことが書かれていた 5・4・3・2・1	
	④グループ学習を取り入れた 5・4・3・2・1	
	⑤グループ学習の課題は適切だった 5・4・3・2・1	
	⑥教師の役割ができた(聴く・つなぐ・もどす) 5・4・3・2・1	
月 日	⑦生徒一人ひとりが学ぼうと意欲的に取り組んでいた 5・4・3・2・1	【明日からの授業に活かしていきたいこと】
	①めあてを提示できた 5・4・3・2・1	
	②めあての設定は適切だった 5・4・3・2・1	
	③振り返りを書かせることができた 5・4・3・2・1	
	④振り返りシートに、書いて欲しいことが書かれていた 5・4・3・2・1	
	④グループ学習を取り入れた 5・4・3・2・1	
	⑤グループ学習の課題は適切だった 5・4・3・2・1	
()月 ()日	⑥教師の役割ができた(聴く・つなぐ・もどす) 5・4・3・2・1	【明日からの授業に活かしていきたいこと】
	⑦生徒一人ひとりが学ぼうと意欲的に取り組んでいた 5・4・3・2・1	
	①めあてを提示できた 5・4・3・2・1	
	②めあての設定は適切だった 5・4・3・2・1	
	③振り返りを書かせることができた 5・4・3・2・1	
	④振り返りシートに、書いて欲しいことが書かれていた 5・4・3・2・1	
	④グループ学習を取り入れた 5・4・3・2・1	
()月 ()日	⑤グループ学習の課題は適切だった 5・4・3・2・1	【明日からの授業に活かしていきたいこと】
	⑥教師の役割ができた(聴く・つなぐ・もどす) 5・4・3・2・1	
	⑦生徒一人ひとりが学ぼうと意欲的に取り組んでいた 5・4・3・2・1	

「見通す・振り返る」学習活動充実への手引き

～「めあて」と「振り返り」を位置づけた授業づくり～

1 「見通す・振り返る」学習活動を重視する背景と意義

教育基本法 第6条

2（略）自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない。

学校教育法 第30条

2（略）主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。



学習指導要領の改訂において、学習意欲の向上を重視

現行学習指導要領への明記（小中ともに、総則に加わる）

【小学校学習指導要領 第1章総則 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項】

各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。

* 中学校学習指導要領にも、第1章総則 第4に記載

（小学校学習指導要領解説 総則編から抜粋）

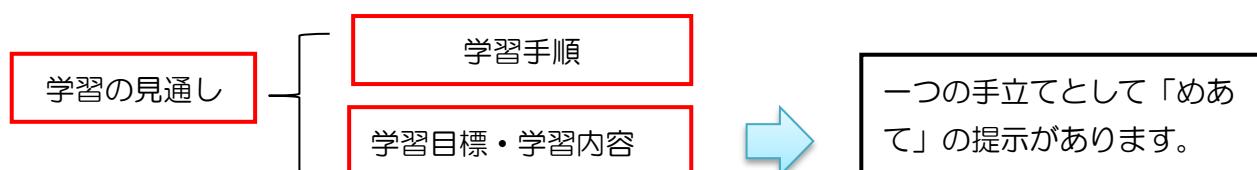
例えば、授業の冒頭に当該授業での学習の見通しを児童に理解させたり、授業の最後に児童が当該授業で学習した内容を振り返る機会を設けたりといった取組の充実や児童が家庭において学習の見通しを立てて予習をしたり学習した内容を振り返って復習したりする習慣の確立などを図ることが重要である。これらの指導を通じ、児童の学習意欲が向上するとともに、（中略）学習内容の確実な定着が図られ、思考力・判断力・表現力等の育成にも資するものと考えられる。

「何を学ぶのか」を理解し、結果として「何を学んだのか」を実感できる授業に向けて、これまで以上に意識して取り組むことが必要です。それらを通して、知識の獲得や思考力等を高めたりすることのみならず、常に見通しを立て、学んだら振り返るという姿勢を児童生徒に育むことが求められています。

2 「めあて」、「振り返り」の機能

(1) 「めあて」

① 学習の見通しを立てます。（「何を学ぶのか」を理解する）



② 授業への興味・関心をもつことで、学習意欲を高めます。

(2) 「振り返り」

- ① 授業の内容が身についたかどうかを確認します。（「何を学んだのか」を自己確認）
○何がわかり、何がわからなかったのかを明らかにします。（メタ認知）
○学習内容を定着させます。
○文章化して振り返ることで、「思考力」「判断力」「表現力（書く力）」をつけます。
- ② 学習の意味を確認したり、達成感を得たりします。
- ③ 次の授業や今後の学習の見通しにつなげます。

3 授業への導入に向けて

(1) 授業の流れ（例）45分授業

教科の目標、児童生徒の実態、本時のねらい（めざす子どもの姿）	
① 導入（5～10分）	・学習の見通しをもたせる（めあて、課題の提示）
② 展開（中心となる学習活動）（25分～35分）	・めざす子どもの姿に向けた、「学び合い」や「言語活動」
③ 終末（5～10分）	・まとめ（授業者が行う） ・振り返り（児童生徒が行う）

(2) 「めあて」を作成・提示する際のポイント

- ① まず、学習指導要領の領域や内容（指導すべき事項）をふまえて、授業でつけたい力（ねらい）を明確にし、それに即してゴール（授業終了後の、めざすべき子どもの姿）を設定します。そのゴール（めざすべき姿）を、児童生徒たちの視点から表現したものが「めあて」になります。

○「めあて」と「ねらい」を区別します。

「ねらい」・・・「授業でこういう力をつけてほしい」などの、教員の視点でつくられた単元や授業の目標です。

「めあて」・・・児童生徒が振り返ることができることばで、ねらいを具体化したもので、児童生徒の視点に立った目標です。

- ② 原則、授業の前半で黒板に提示して、最後まで消しません。

○教員の「ねらい」を児童生徒の「めあて」にするための手立て。

- ・児童生徒の既習事項や生活経験のことばでかきます。
- ・提示した課題等をもとに、児童生徒と「めあて」をつくれます。
- ・授業中に何回か立ち戻ります。

ゴールから「めあて」をつくりましょう。



【留意点】

○「めあて」は、「振り返り」と対応します。

・「～を考える」「～を調べる」という「めあて」は、「振り返り」が曖昧になります。「～がわかる」「～ができるようになる」という「めあて」なら、「振り返り」がはっきりし

ます。

・「なぜだろう」といった疑問形の「めあて」も、「振り返り」と対応しやすくなります。

○学習過程で発見するものや、課題の解答を直接示すものではありません。

○すべての教科を対象に提示することを基本とします。

(3) 「振り返り」を充実させるポイント

- ① 「めあて」に沿って、わかったことやわからなかったことを書いたり、提示された評価問題を解いたりすることで、学習内容を振り返ります。

○振り返る視点を児童生徒に与えます。

始めのうちは、授業の中で登場するキーワードを、色チョークで囲み、それに沿って振り返ったり、キーワードを入れた設問（振り返りのテーマ）を設定したりするなど、児童生徒が振り返りやすくすることが必要です。

【本時のめあて】

比例の関係を式に表すことができる。



(例)「比例」、「対応」、「きまった数」、「関係を表す式」を使って、今日の授業で、わかったことやわからなかったことを書きましょう。*字数や行数を指定することもあります。

○「まとめ」と「振り返り」は、区別します。

「まとめ」は、設定した課題に対する答えやゴールになるものを、授業者が主体となって整理・提示するもので、児童生徒が行う「振り返り」とは、主体が異なります。

- ② タイムマネジメントを意識します。(授業の終末に5分程度の時間を確保)

- ③ 授業者は、児童生徒が振り返った内容から、授業の目標（ねらい）の達成状況を確認し、次の授業や補充学習・家庭学習につなげます。

「めあて」に沿った「振り返り」にしましょう。

【留意点】

○単に頑張ったことや授業の感想だけを書くものではありません。

○わからなかったことも書かせるようにします。

○「まとめ」を写すだけの「振り返り」にならないような工夫が必要です。

○すべての教科で取り組みますが、方法・タイミング・頻度などは、児童生徒の状況や授業の内容などに応じて柔軟に考えてください。

○できるようになったという自覚や達成感、次への課題意識などを児童生徒が持てるように適宜評価します。



(4) 板書例

めあて	円の面積を求める式をつくること ができる。	長方形の面積＝たて × 横 円の面積＝半径×円周の半分 ＝半径×（直径×円周率÷ 2)
課題、問	半径10cmの円があります。この円の形 を変えて、円の面積を求めましょう。	まとめ
考え、わかったこと		円の面積を求める式（公式） 円の面積＝半径×半径×円周率
Aさん 方法1	Bさん 方法2	Cさん 方法2
振り返り		

(5) 「めあて」と「振り返り」の具体例

①【小6・社会】単元：源氏と平氏の戦いと鎌倉幕府

【授業の目標】元との戦いの様子を絵図や資料、写真などをもとに調べ、この戦いが鎌倉幕府の力を弱めることになったことをとらえることができる。

めあて	例1：鎌倉幕府が、元との戦いの後に、おとろえていった理由がわかる。 例2：鎌倉幕府はなぜ、元との戦いの後に、おとろえていったのだろうか。
-----	---



<振り返りのテーマ>

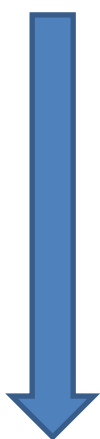
「御家人」、「命」、「不満」をキーワードに、鎌倉幕府が、元との戦いによって、おとろえていった理由を書きましょう。

振り返り	たくさんの御家人が、幕府のために命をかけ、時間とお金もかけ、元と戦った。しかし、戦いの御恩として領地をもらえた者はわずかだったので、幕府に不満をもつ御家人が出てきて、幕府と御家人の結びつきが弱くなっていったから。
------	--

②【小5・算数】単元：四角形や三角形の面積

【授業の目標】台形の面積の求め方と面積の公式を理解する。

めあて	例1：台形の面積を求める方法がわかる。 例2：台形の面積の求め方を理解することができる。 例3：どうしたら台形の面積を求められるのでしょうか。
-----	---



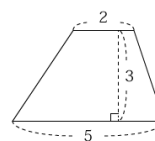
<振り返りのテーマ>

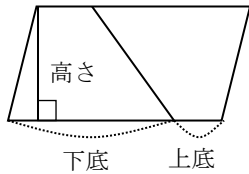
【文章記述形式】

「平行四辺形」または「三角形」をキーワードに、台形の面積を求める方法を1つ書きましょう。また、その方法を使って、台形の面積の公式ができる理由を説明しましょう。

【評価問題形式】

次の台形の面積を、平行四辺形や三角形を利用して求めなさい。また、台形の面積の公式を使って求めなさい。



振り返り	【文章記述形式】の場合 同じ台形を2つ足すと、平行四辺形になる。その面積を求めて半分にすると台形の面積が求められる。平行四辺形の底辺は、上底+下底だから高さをかけて、2で割った式が面積の公式になる。 
------	---

4 よくある質問

Q1 「振り返り」について、学年によって発達段階が違うので、一律の方法では無理があると思う。例えば、小1の場合など、ようやく文字が書けるようになってきた段階では、どんな方法があるのか。

A 「振り返り」としては、「書く力」を育むためにも「めあて」に対応して文章化する活動を基本に考えています。

しかし、発達段階や児童生徒の状況・課題などをもとに、活動を設定してください。右に示すのは、小学校1年生の例です。

さんすう ふりかえり 月 日 (なまえ)	
◎ ○ △ をつけましょう	
①きょうのがくしゅうは、たのしかった。	
②きょうのがくしゅうは、よくわかった。	
③じぶんのかんがえを もつことができた。	
きょうのがくしゅうでおもったこと (わかったことや、ともだちのよかったところ)	

Q2 毎時間、全教科でするのか。また、授業全体ではなく、特に大切な一部を振り返ることでもよいのか。

A 「めあて」の提示と「振り返る」学習活動は、全教科を対象に、原則毎時間実施することを想定しています。ただし、授業の内容や生徒の状況等に応じて柔軟に考えてください。また、「振り返り」は、「めあて」が達成できているかどうかを確認する活動ですから、授業の一部分に絞ることもあります。

Q3 「振り返り」を入れると時間的に厳しくなるのではないかと。また、入れるにしてもタイミングはやはり授業の最後なのか。個人の振り返りの後、全体で交流するようなケースも考えているのだが。

A 「導入」「展開」と同じように「まとめ」の段階で「振り返り」を位置づけて授業を計画しますが、時間内に「振り返り」ができなかった場合は、宿題にすることも考えられます。また、「振り返り」は、授業終末の取り組むことが一般的ですが、「振り返り」の後に全体交流をする場合も考えられますし、時間をかける必要があればタイミングを早めるなど、活動内容を工夫する必要もあるでしょう。

Q4 ノートに書いた「振り返り」をチェックする頻度やタイミングはどうか。宿題にノートを使用する日は、下校までにノートをチェックし、返却する必要があるかととても難しいことだと思う。

A ある小学校は、算数に絞って、ノートに記された毎時間の「振り返り」を、その日の内にチェックし、返却しています。また、下校までに返却することが厳しい場合は、ワークシートに記入させる方法もあります。

Q5 書くことがとても苦手で、「振り返り」を書けない児童生徒への対応はどうするのか。

A 初めの間は、様式を示し、それに沿って書かせたり、具体的でわかりやすいテーマを設定したりするなど、児童生徒が、振り返りやすくする工夫が必要です。ただし、いわゆる「穴埋め」式での振り返りなどを継続していくと、「振り返り」による書く力の向上にはつながりにくいと考えます。

津市版授業改善マニュアルの活用について

子どもたち一人一人が、自己と社会との関係性を自覚し、よりよい社会の実現に向け、未来へ飛躍できる人材となるためには、問題解決に向けた考え方や行動についての能力を高める学習を展開することが大切です。

そのためには、今までの授業のあり方を見直し、子どもたちが「わかること、できること」を実感できる授業改善の取組を推進することが必要です。

「津市版授業改善マニュアル」が、学校全体で効果的に活用され、津市の未来を担う子どもたちに確かな学力を身に付けることへとつながることを願っています。

授業改善マニュアル「理論編」・「実践編」 別冊 「教科編」

「理論編」・・・子どもたち一人一人に身に付けるべく「21世紀を生き抜く力」とは、それらの力を育成するために必要な教員に求められている資質能力とは、そして、次期学習指導要領が目指しているもの等、今後めざしていく教育の基本的な方向性をまとめました。



「実践編」・・・子どもたち一人一人に「わかった」「できた」を実感させるための授業づくり（授業形態、ユニバーサルデザイン等）、授業改善の視点等をまとめました。



別冊 「教科編」・・・各教科等（特別支援教育、国語科、算数・数学科、社会科、理科、英語科）において、それぞれの課題を明確にし、その改善を図るための授業づくりの視点等を具体的に紹介しています。



授業改善マニュアルの活用

学力・学習状況調査等の結果を踏まえて授業改善を行う場合、校内研修会において、国の動向を踏まえた子どもたちに付けたい力を協議する場合、経験年数の少ない教員が、授業づくりについて学びたいと考えている場合など、用途に応じて「理論編」、「実践編」、別冊「教科編」を効果的に活用してください。

また、板書やノート等の具体的な指導方法や各教科における授業改善等は、すぐにも実践に活かれますので、必要なところからご活用ください。

【活用事例1 校内研修会にて】

次回の研修会では、『理論編』を使って、授業改善について話し合います。



教科の授業改善については、『実践編』を参考にしたいと思います。

【活用事例2 日常会話から】

初任者で分からないことばかり・・・



先輩の先生方に聴いたり、授業を見せていただいたりすることは勉強になります。また、『授業改善マニュアル』では、いろいろな視点からのヒントが得られると思うので、ぜひ活用してみてください。



『理論編』の活用

●「理論編」では、次の内容を紹介しています！



- 学力向上のための取組の検証
- 教育の目指すところ
- 教員の資質・能力
- 学習指導要領の解釈
- 授業力向上の視点
- 子どもにつけさせたい力
- 授業力改善の構成要素
- 授業改善とは
- 家庭学習の提示
- 参考資料



自分の授業を振り返り、どこを改善すべきか知りたいけど、どうすればいい？



学習指導要領が改訂されると聞いたけど、どのような方向に向かっているのかな？



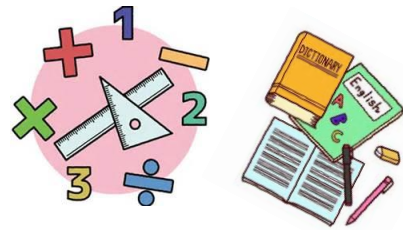
マニュアルの『理論編』では、次期学習指導要領の目指す方向性や授業改善に向けてのポイント等を紹介しているから、参考にするといいね。



●「実践編」「教科編」では、次の内容を紹介しています！



- 授業づくり
 - ・ 児童生徒理解
 - ・ 授業構成
 - ・ 教材解釈
 - ・ 授業展開
 - ・ 授業評価
- 授業づくりの基盤
- ユニバーサルデザイン
- 学習形態



○ 各教科等における視点

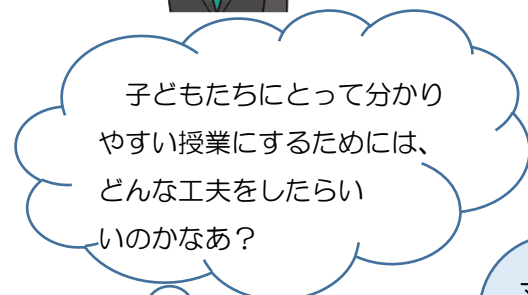
- ・ 特別支援教育
- ・ 国語科
- ・ 算数・数学科
- ・ 社会科
- ・ 理科
- ・ 英語科



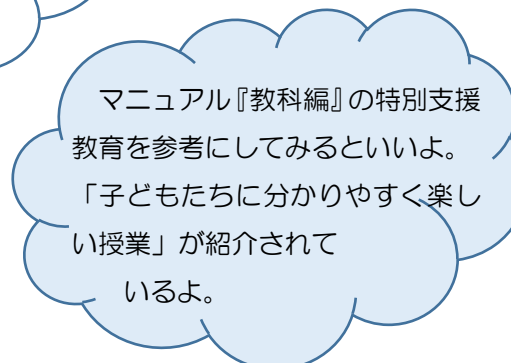
学習改善マニュアルの『実践編』に板書やノート指導が具体的に紹介されているから参考にしよう！



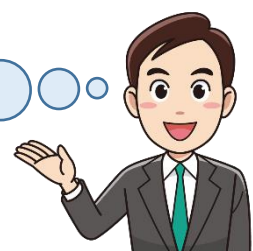
板書やノート指導が大事だと言われているけど、どうしたらいいかわからずに困っています・・・。



子どもたちにとって分かりやすい授業にするためには、どんな工夫をしたらいいのかなあ？



マニュアル『教科編』の特別支援教育を参考にしてみるといいよ。「子どもたちに分かりやすく楽しい授業」が紹介されているよ。



索引

あ行

アクティブラーニング 19 39

教えて考えさせる授業 23

生きる力 5 35

か行

学習指導要領 15

学習指導要領解説 15

家庭学習 4 40

カリキュラムマネジメント 18 39

基礎力・思考力・実践力 6

教材解釈 37 39

さ行

思考力・判断力・表現力 17 20 28

資質・能力 11 17 35

児童生徒理解 36 39

習得・活用・探究 3 20

授業改善 38

授業構成 36 39

授業作りの基盤 37 39

授業展開 37 39

授業評価 37 39

授業力 20 35

全国学力・学習状況調査 1 40

な行

21世紀型能力 5 8

ま行

めあて・振り返り 3 39 50

編集

津市教育委員会事務局 教育研究支援課

監修

森脇 健夫 三重大学教育学部教授

協力

市川 伸一 東京大学大学院教育学研究科教授

参考

学習指導要領（平成20年3月）

教育課程企画特別部会 論点整理

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（中央教育審議会）

教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5（国立教育政策研究所）

教育課程の編成に関する基礎的研究報告書7（国立教育政策研究所）

学習指導要領・生きる力Q & A（文科省）

「教えて考えさせる授業を創る」（市川伸一著 図書文化）

「教えて考えさせる授業の挑戦」（市川伸一著 明治図書）

学習指導要領改定の基本的な考え方（文部科学省）

思考力・判断力・表現力を高める中学校の授業づくり（福岡県教育センター）

「思考力・判断力・表現力」の評価と授業づくりガイドブック

（福岡県教育センター）

子どもの笑顔が生まれる学校改善のためのガイドライン（大阪府教育委員会）

大阪の授業（大阪府教育センター）

これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（中央教育審議会答申）

高い専門性と豊かな人間性を備えた教員の育成のために」（三重県教育委員会）

「長野県教員研修体系」（長野県教育委員会）

言語活動の充実に関する指導事例集（文部科学省）

わかる授業サポートガイド（沖縄県教育委員会）

シンキングツール～考えること教えたいこと～（黒上晴夫 小島亜華里 秦山裕）

協調学習とは （三宅なほみ 東京大学C o R E F 河合塾編著）

津市版授業改善マニュアル

理論編

編集・発行 平成28年11月

津市教育委員会事務局

教育研究支援課

津市西丸之内23番1号
